
クリムゾン・アイ（魔力を吸う者）

ABC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリムゾン・アイ（魔力を吸う者）

【Nコード】

N9196W

【作者名】

A B C

【あらすじ】

他人から魔力を吸収する事でしか生きられない女性とエリート魔法使いの間に生まれた少年。魔法が常識となった現代、魔力により優劣が決まる時代で彼は平穏な日々を送っていた。しかし高校進学と共にその平穏は崩れ去る。彼はヴァンパイアと蔑まれるようになり、さらには……

9 / 26 タイトルを変更しました。

プロローグ

魔法使い、妖術使い、ネクロマンサー、召還師、錬金術師、ヴァンパイア、超能力者……

例えあげれば切が無い、これらの超常現象を引き起こす者達。しかし科学者達の長年の研究と努力により、その殆どが光学や催眠術、薬物、錯覚を用いたトリックであると証明されている。

科学者達は全ての事象は科学で証明出来る物であると断言し、超常現象の類を一切認めようとしなかった。だが、21世紀の現代でも、僅かながらに科学で証明出来ないものが存在している。

そして科学者 国際科学技術省はついにそれらの存在を認めただった。

(一部の科学者達は未だに認めているわけではないのだが……)

国際科学技術省の表明により世界は大きく動き出しすことになった。

国際魔法研究機構 (ISRO) の設立である。

ISROでは、これまで各国が極秘で進めていた、それら超常現象の研究を一手に担う事で、あらゆる情報、事象、研究対象の増大により、全てが解明されないまでも、その研究は飛躍的な進歩を遂げている。

しかし、ある程度研究が進むと、各国はそれぞれ独自の研究開発を進める事になった。

もともと殆どの国が極秘で研究していたので、その機関を再び動かしただけなのだが……とは言っても、その規模は各国とも今までとは比較にならないほど拡大している。公に研究を進めることおあやけで、研究費などを大幅に増やし、今や軍事費を遥かに上回っている。まさに各国が競争するように研究を推し進めているのだ。

なぜ、それ程までに？

魔法の軍事利用が可能と判断されたからだ。

場合によっては1人の魔法使いが重火器兵器を超える力を発揮する。

そして全ての人間が訓練を行うことで魔法を使えるようになる。

重火器兵器一基造る費用で数十人も魔法使いを生み出せるとなれば、もはや重火器兵器など無用の長物である。

そしてそれは日本でも同じであった。

全国各地の小学校で入学と同時に魔法の適正を検査される。

検査内容は以下の2点。

魔力の力量 (Magical ability) 魔力が強い弱いと表現する場合はこちらの事を言う。

魔力の蓄積 (Magical storage) 魔力量、魔力蓄積とも呼ばれることもある。魔力が多い少ないという場合はこちらの事を言う。

ここである一定値をクリアした生徒は特別授業として魔法の訓練を行う。

しかし、ここでその人生が左右されると言っても過言ではない。

つまり一定をクリアすればエリートとしての教育を受け、逆に一定以下の者はエリートの道がほぼ閉ざされてしまう。

これほどの明確な差別教育に一時は不満の声も多くあがったが、政府の対応は簡単だった。

軍事費削減で浮いた国家予算を教育援助金に当てると発表したのだ。

国民は現金なものである。その発表で反対の声は一気に治まってしまった。

そして『エリートの道がほぼ閉ざされた』とは言え、完全に閉ざ

された訳ではない。

大抵の場合は、魔力の力量、蓄積量ともに、年齢に比例して十五歳くらいまで増え続けるとされているが、稀に爆発的に増える場合がある。そうなればそこからエリート教育が始まる。それに期待する親も少なくは無かった。『うちの子に限ってこのままで終わるはずが無い』そう考える親は実際かなり多かつたのだ……

しかしここに一人、そのエリーートの道を歩みながら、十五歳で脱落した者がいた。

「ちょっとー、ジン、どうしてなのよ！」

「ん？ 俺がアホだからだろ？」

数メートル先を歩きながら、振り向き様に聞いてきたのは水月風夏^{みつきふうか}。

由緒正しき水月家の御令嬢である。

水月家と言うのは日本でも屈指の魔法使いの家系で、風夏はその一人娘なのだ。

ちなみに俺は鳴神^{なるかみじん}刃。そして俺の家、鳴神家も水月家に劣らない名家なのだが……

俺達は今、私立高校入学試験の合格発表を見に行った帰りである。そして風夏はもちろん合格、俺は見事不合格だったのだ。公立高校を受けると言う選択肢が無い俺は高校浪人か、もしくは親に土下座して不正入学を願い出るしかないのだ……

まあそれは冗談だが、実際は家を追い出され兼ねない。俺は鳴神家の厄介者だから。

それはさて置き、俺は風夏に答えながらも、目を逸らしていた。

この女が突然振り返るから、セーラー服のスカートが舞い上がり白い太腿が露になっていたのだ。純粋な中学生には目に毒である。しかし風夏は、そんな俺の心情を露知らず、更に捲くし立ててくる。

「同じ高校行けないじゃない、どうしてくれるのよっ！」

「んなこと言われてもなあ……」

「ってゆうか、鳴神家の御坊っちゃんが不合格とかおかしでしょ？」

「どういう理屈だよ？ 家柄で合格が決まる訳じゃないだろ……」

「そ、そりゃそうだけど　でも血筋って大きいでしょ？」

「まアそうだろうけど、その血筋が問題なのかも……」

俺は言葉尻を濁した。触れたくない会話に入ってしまったからだ。

「ってゆうか、いい加減教えてよ、お母様が亡くなってからよね？」

アンタがおかしくなったのって」

「チィ！　またかよ……　そっちこそいい加減にしろよ！」

「はう……」

俺の口調がちよっときつかったようで、風夏は悲鳴の様な吐息を吐いて俯いてしまった。

こいつは他人を平気で責める癖に、責められることにとことん弱いのだ。

まあそこが可愛いっちゃ可愛いんだがな。

俺はそんな風夏の頭をガシガシと撫でて謝る。

「ゴメン。その内教えるから、もう少し待ってくれよ。な？」

俺は風夏の頭を撫でるのが好きだ。風夏も嫌じゃないみたいで滅多に拒否する事はない。

むしろ、機嫌を直してくれる事が多い。

「う、うん。分かった」

頬を薄っすら朱に染めて頷く風夏。

この素直さがまた可愛いんだわ。俺はそんな風夏を横目に一人ニヤニヤしていた。

だが、いつまでも隠しているのは確かに悪いとは思う。

しかし教えれば俺はこの大事な幼馴染を失う事になる。

そう、俺が鳴神家の厄介者であるのには理由がある。

鳴神家は水月家と並び、日本でも屈指の魔法使いの家系である。しかし俺の父親はよりにもよって『蓄積不良貧魔力症』の女性と結婚したのだ。そして生まれたのが俺である。

今はその母も死に、父親は後妻が迎えて跡継ぎも生まれている。俺は前妻の子という理由でこの後妻に大層嫌われている。さらに母の死直前に聞いたのだが、母親は『吸魔力種』という存在だった。

蓄積不良貧魔力症。

読んで字の如くだが、魔力を蓄積出来ず、魔力が貧しい病気である。

普通魔力は使えば減るが、時間と共に回復し体内に蓄積される。これが魔力蓄積である。しかしこの病はその蓄積が出来ない、または極端に遅いのだ。更にこの病は不治の病とされ、原因、治療法も今だ解っていない。軽度中度の場合はそれ程問題ないのだが、重度的場合は死に至る。しかも延命処置も不可能らしい。その発症率は10万人に1人と言われている。

ここまでなら普通の病人だったのだが、母親はそれだけでは済まなかった。

純潔の『吸魔力種』と言われる存在だった。

そうで無ければ、まだ生きていたのかもしれない。

吸魔力種。

こちらも読んで字の如く、他人から魔力を吸収するのだが病気ではない。『種』なのだ。つまり人間の亜種扱いである。現在日本には数千人から数万人の吸魔力種が暮らしていると言われるがその数は定かではない。その殆どが吸魔力種であることを隠しているから

だ。そして吸魔力種は必ず蓄積不良貧魔力症を抱えている。

簡単に言えば現代の『ヴァンパイア』だ。そして過去の御伽噺や伝承に登場する吸血鬼の正体はこの吸魔力種達だったと言われている。

一応法律で吸魔力種も人間と認められてはいるが、科学者、医師などの中には「普通の人間として扱うべきではない」と言う者もいる。他にも、吸魔力種を絶滅させるべきだと言う団体も存在する。

また年に数回は吸魔力種が集団リンチで殺される事件が起きている。吸魔力種はそれ程に忌み嫌われる存在なのだ。

ちなみに俺も蓄積不良貧魔力症なのだが、混血だからなのか幸い重度ではない、もし重度だったら母親が死んだ時点で俺も死んでいただろう。俺に魔力を与えてくれたのは母親ただ1人だったのだから……

母親が死ぬ直前のことだ。

「ジン、大事な話だからしっかり聞いて頂戴。母さんは普通の人間じゃないの。吸魔力種と言われる人間、他人から魔力を貰わないと生きていけない身体なのよ。　　今まではあなたのお父様が魔力を与えてくださったわ。でも……　　もうそれも無理なの。だから母さんはあなたとお別れしないといけない。でもあなたは違うわ。少ないけれど自分でも魔力の蓄積が出来るでしょ。　　今まで

はわたしがあなたに魔力を与えていたけれど、これからは出来るだけ自分の蓄積分だけで生きて欲しい。吸魔力種であることを出来るだけ隠して普通の人間として暮らして欲しいの。それがあなたのためだから。それから、……　　お父様を恨まないでね。これは母さんの最後のお願ひよ。　　今まで隠しててゴメンね」

母さんは最後に「ジン愛してるわ」と囁くと、薄っすらと笑みを浮かべその碧眼を閉じた。

そして2度とその目が開く事はなかった。

そうだった、俺は知らず知らずに母さんから魔力を貰っていた。
なんの疑問も感じずに……

何故父は俺に魔力を与えてくれなかったのか？

何故母は父から魔力を与えられなくなったのか？

しかし母さんは親父を恨むなと言った。

「……………母さん……………」

そして俺が高校入試に失敗したものの、これが原因だと思う。

俺達が受けた高校は日本でも超エリート魔法専門高である。

母親が生きていた小学校時代は常に母親から魔力を貰い、人並み以上の魔力を有していたが、中学１年で母親が無くなると俺は魔力を得る糧が無くなった。つまり微量な蓄積のみである。

もちろん高校入試でも魔法の適性検査は行われる。今の俺の魔力量では合格ラインに届かなかつたのだらう。

ちなみに、魔力量が減るのを恐れ、魔力（力量）はわざと抑えていた。

1話

「まあ、鳴神の人間として有りえない事だわ」

汚物を見るような目でそう吐き捨てたのは、なにを隠そう俺の継母である。

名前はあえて口にしたくないのでここでは控えることにする。

この継母が言うのは、もちろん俺の高校入試失敗の件である。

まあ当然と言えば当然かも知れない。鳴神家は代々魔力に優れ、父親は魔法省のお役人。いずれはトップの椅子に座るとされている。もちろん祖父や曾祖父も代々魔法省大臣を経験している。そんな家系の息子である俺がたかが高校入試でエリート脱落となればお怒りも当然というものだろう。

そして瞑目し黙ったままだった父親が口を開いた。

「マンションを買ってある」

一言そう言うと、継母に「あとはお前が説明しておけ」そう言ってリビングを出て行った。

親父は昔から俺と言葉を交わす事を嫌った。この15年、親父と話した回数など数えるほどしか記憶に無い。

30畳はあろうかと言うリビング。そこに俺は継母と2人残された。

嫌な空気が流れる中、継母から1通の封書を渡された。

「そこに詳しい事は書いてあるわ。あとはご自分の部屋で読んで頂戴」

継母は相変わらず吐き捨てるような物言いで、さっさとリビングから姿を消した。

まあ俺としても、継母と2人きりほど居心地が悪いする物はないのでホッとしているのだが、とりあえず封書の中身が気になった。内容はある程度予想できているのだが……

俺はすぐさま2階にある自分の部屋に戻った。

そして扉を開け、驚愕で一瞬固まってしまった。

部屋はもぬけの殻、家具はおろか机、ベッドに至るまで何一つ無かった。

とりあえず、床に座り封書の中身を確認した。

そこには1通の通帳とカギと手紙が同封されていた。

内容はこうだ。

記載の住所で1人暮らしをして下さい。（無断で転居は認めません）

あなたの荷物はすでに配送済みです。

今日限りこのお邸への出入りは禁止します。

お金と住む所は与えませんが、もし問題を起こせば鳴神家はあなたとの縁を切り、援助もストップします。

とまあこんな感じの内容だった。

なるほど、親父はコネで先に俺の不合格を知り全て手配済みって訳か。

予想していたとおり、俺はこの家を追い出されるわけだが、ついでに荷物も配送してくれたなら手間が省けたつてもんだ。まあ1人暮らしには憧れがあったし、ラッキーっちゃあラッキーかもしれない。

そして俺は手ぶらで邸を出た。

もちろん、親父や継母の見送りなんてものはないが、執事やメイドは涙を薄っすら浮かべ悲しんでくれた。俺はあえて笑顔で今までの礼を述べ邸をあとにした。

やってきたマンションは思っていたより豪華だった。

そこは50階立てのタワーマンションで重厚なエントランスを抜

けると中庭があり、一瞬森に迷い込んだと思うほどだ。エレベーターで最上階に上がり部屋に入ると、20畳ほどのリビングに10畳ほどの洋間を備えた1LDKである。

しかし憧れの1人暮らしとは言っても、俺は家事の類など一切した事が無い。まあ通帳にはたつぷり金が入ってるようだし、毎月仕送りもある。毎晩デリバリーを頼んでもいいかと1人納得する。

そんな事を考えていると携帯の着信を知らせる音が室内に鳴り響いた。

俺は液晶画面を見て、とうとう来たかと思ったが、嬉しい反面、苦笑が浮かぶ。

しかし何時までも放置するわけにもいかず、とりあえず通話ボタンを押した。

こつちが返事する前に、けたたましい怒鳴り声が耳を襲った。「ちよつとお、どういうことよ!」

風夏である。いつもの様に家に遊びに来てメイドか執事に聞いたんだろう。

「つて、耳が痛てえよ、落ち着いて話ししろよ」

「これが落ち着いていられるわけないでしょ!」

偉い剣幕である。いつも煩い風夏だが、今日は特別だ。

「俺に怒鳴っても仕方ないだろお、俺になにが出来るんだよ?」

「そ、そうかもだけど、でもアンタそれで言いわけ?」

「ああ、憧れの1人暮らしだな。気楽なもんだぜ」

「つとにアンタって人は…… まあいいわ、じゃ切るわね」

「ん? あ、ああ」

ガチャ!

やけにあっさり切りやがった。一体なんで掛けて来たんだ? と思っているとドアフォンが鳴り響いた。

まさか! と思えばドアフォンの液晶モニタを見ると、そこに映っ

ているのは風夏である。

俺はマンションの正面玄関の扉を開け、さらに自室の鍵も開けた。数分後にまたドアフォンの音がなる。俺は「開いてる」と怒鳴った。

……

玄関に入るなり立ち尽くす風夏。

制服や普段着とは違い、やけに大人っぽい服装だ。

薄青色の花柄ワンピース、いやドレスと言っべきか？

短すぎる裾から白く細い脚がすりと伸び、腰の辺りをリボンで締めたドレスは襟元がやけに開いて胸のふくらみが強調されている気がする。普段の腰まで降ろした金色の髪も後頭部で結びうなじを目立たせている。顔を見ると薄っすら化粧もしているようで、普段でもアイドル顔負けの美少女が今や妖艶な女を演じているようだ。

まじ中学生の俺には目のやり場に困る。

困るのだが、目が離せない。

風夏はそんな俺の視線に気が付いたのか、「あ、この服？」と言って化粧で染めた頬を更に赤く染めている。

「えつとね。ちょっと言いづらんだけど、今日、家で合格祝いだからってパーティーしてくれんだ。それでなの。えへへ」

えへへ、と笑ってはいるが、顔が引き攣っている。

ってか、普段なら「ガン見すんなあ！」って、どやされてるはずだ……

なにか違和感を感じながらも、とりあえず玄関で話してものやりずらいので、部屋に入るように促した。

風夏はモジモジしながらも部屋に入るとベッドに腰を降ろす。

俺はそんな風夏を不審に思い聞いてみた。

「おまえ、さつきからおかしくない？」

「え、な、なにが？」

なにがって、どもってる事自体おかしいだろ……とは言わなかったが、

「いつもなら、言われなくても入ってくるだろ。それになんかモジモジしてないか？」

「そ、そんなことないけど……」

風夏は俯き、更に顔が赤くなっている。

こんな風夏を俺は見たことが無い。生まれて15年、はつきり言つて実の親より長い時間を一緒に過ごして来たはずだ。それなのに、まだ俺の知らない風夏があったってことか。

すこし寂しい気もするが、男と女なら仕方ないことかもしれないと納得する事にした。

そして俺はおもむろに風夏の横に腰を降ろした。

「きゃっ！」

風夏はビククリしたように飛び上がり、立ち尽くしている。俯いで、手をスカートの前でゴニョゴニョ動かして……

「おまえ、もしかして……」

俺はそれ以上口に出さなかった。

「だ、だって、男の人の部屋に入るのって初めてだし……」

「いつも、俺の部屋に勝手に入ってくるだろ！」

「……………」

俺はさっぱり分からなかった。

とりあえず風夏を、もう一度ベッドに座らせ、俺は床に腰を降ろした。

そして話題を変えて、この嫌なムードを断ち切る事にした。

「そっぴやパーティーとか言ってたけど、おまえんちって両親海外で居ないだろ？」

風夏の両親は2人とも国際魔法研究機関のお偉いさんらしく、ほとんど日本にいないのだ。

「う、うん、じいやが言い出したの。で、執事さんやメイドの人達

も張り切っちゃって……で、一応アンタも誘おうかなって迎えに言ったら　お邸を出たって言うじゃない？　もうビックリして慌てて来たってわけ」

「それで、そんな格好なのか、寒かっただろ？」

「うん、夢中だったから……」

「そかあ、つてかそれならこんな所に來てる場合じゃないだろ？」

皆おまえを待つてるんじゃないのか？」

「こんな所……？」

風夏の眼つきが変わった。

「來てる場合じゃない……？」

さっきまでの照れなど何処吹く風と言った感じである。

「……アンタがお邸追い出されて、わたしがパーティーなんて出られると思ってるの！？　逆の立場ならアンタはわたしほったらかして平気でパーティー出るわけ！？」

つげ、急に切れやがった。

だが、そう言われると俺には返す言葉もない。

「あー、悪かったよ。ごめん……」

俺は素直に頭を下げた。俺だって逆の立場なら、こいつをほっとけるわけが無いのだ。

「でも、皆が待つててくれるのは事実だし……　ねえ一緒に行かない？　こんな時間からお部屋の片付けも出来ないでしょ？　なんなら今日はうちに泊まって、明日一緒にここの片付けすればいいじゃない？」

たしかに、荷物を解かないと布団すらない状態だ。冷蔵庫の中身も空だろうし、てか電源はいつてねー……　今から外食も面倒だし、寝るのもまま成らない。

そんなことを考えていたら、風夏は遠慮がちに聞いてきた。

「やつぱり、パーティーなんか出にくい、かな？」

首をちょこんと傾いでいる。まるで子リスのようじ。

「なんでだ？　お前の合格祝いだろ。当然俺も出席するよ」

「ほんとに！ いいの？」

風夏は満面の笑みを浮かべている。照れたり怒ったり喜んだり、ほんとに忙しい奴だ。

俺は部屋の片づけは明日にして、今日は風夏の言葉に甘える事にした。

そして今日こそ風夏に話しをしようと思っただけだ。

2話

急遽と言うか、風夏本人が今日まで知らなかったのだから当然かも知れないが、風夏の高校入試合格パーティーは小規模なもので、出席者も俺と風夏と水月の家に仕える執事やメイドだけである。もちろん俺はしょっちゅう出入りしているので皆の顔を知っている。

一通り風夏にお祝いの言葉や贈り物を渡し終えると、皆は俺が不合格だった事をとても残念がってくれた。だが爺やだけは別だった。「いい気味じゃわい、クソ坊主」とか「お前ごときが風夏お嬢様と同じ学校に行くなど、どだい無理だったんじゃ」とか散々嫌味を言ってくれた。

まあ俺も、昔からこの爺やには散々悪戯（寝ている爺やの頭に『ハゲ』とか『！』とか書いてやった）して来たから仕方が無い。

とは言え、そのおかげで、気まずい空気が吹き飛んだ。

たぶん爺やはワザとやったんだと思う。これがこの爺やの優しさなんだと俺は思ってる。

パーティーが終わると、俺は用意された部屋のベッドに座り、一人くつろいでいた。

幼稚園時代や小学生時代には、よくこの邸に泊まったものだが、中学にはいるとそれも極端に回数が減った。思春期を迎えた所為なのか、母親が亡くなった所為で俺が変わってしまったのが原因なのかよく分からない。

もし母親が原因なら俺はマザコンだったのかもしれないな……などと考え苦笑が浮かぶ。

自分ではマザコンだなんて思った事もないんだが、風夏には何度か言われた事があった。

その原因は俺がよく母親と手を繋いでいたからだ。

魔力を貰う（吸収）為には、ドラキュラ伝説の様に首筋を噛む必

要などは無いのだが、身体の一部に触れる必要がある。その為に手を繋いでいたのだ。

体内の魔力が減ると身体が無性に魔力を欲するようになる。だから母親は常に俺に魔力を与えてくれた。他の人間から吸ってしまわないように。

魔力は普通、使（放出）わなければ減る事はないのだが、俺は魔力が強すぎた所為で魔力制御装置でも抑えきれず知らず知らずに微量ながら魔力を放出していたのだ。

魔力制御装置。通称リング（初期に開発されたものが全てリング状だった為）

魔力（強さ）を大幅に抑え無効化する目的で開発された物で、他者への魔法攻撃（たんに透視や読心行為も含む）を行えない様にする為と、魔力の暴走（酷い場合は自然発火やポルターガイスト現象等）を抑える役目を果たす。形状はヘアバンドや帽子などがあり、一目で目視できる様に装着する義務がある。ただ全ての者が対象になるわけではなく、魔力レベルがG以上の者が対象となり、日本では例えば全国民の約1%と言われている。

ちなみに魔力の強さには10段階、S A B C D E F G H Iのレベルに分かれ、Sが一番強くIが一番弱いと言う意味である。

これとは逆に魔力防御装置と言う物もあるが、魔法制御装置内には必ずその機能が内臓されている。魔力レベルがH以下で魔力制御装置の装着義務がない者は防御装置単独で使う事になるのだが、この場合は装着の目視の義務はない。

ちなみに俺も風夏もヘアバンド状の物を使用している。

コンコン！

無言で部屋の扉がノックされた。

ってことは風夏だろうと予想する。まあ予想するまでもなくメイ

ドなら声を掛けるはずだ。

「どうぞ、開いてるよ」

俺が返事をする、扉が開いてそこに立っていたのはやはり風夏である。

風夏は風呂を済ませたようで今はガウンを羽織り髪もほどこいている。まだ幾分髪が濡れていて、妙に艶めかしい。最近のこいつは目のやり場に困ることが多いのだ。

もちろん家の中でもリングは装着している。これはエチケットでもあるし魔法防御にもなるからだ。

「どうした？」

俺は風呂を勧めに来てくれたんだらうと、軽く聞いてみた。

「ちよつと良いかな？」

やけに愁傷な物の言い方だった。

風呂を勧めに来たわけじゃ無さそうだが、俺はあえて普通に返事をした。

「ああ、入れよ」

風夏は頷くと、部屋に入り俺の横、つまりベッドに腰を降ろした。マンションでは俺が横に座ると逃げたくせに、と思ったが、口にはしない。

冗談など言える雰囲気ではない。

しかし風夏は下を向いたまま口を開こうとしない。

俺は自分の頭をガシガシと掻き、どうしたものかと思案する。

こいつが来た理由は想像が付く、どうせあの件なのだ。

話す決心をつけて来たのだが、どうも俺は臆病なようだ。いざとなると口が開かない。

しかし高校入試も終わり、こいつは合格で俺は不合格。さらに家も少し離れて毎日会うことも無くなるだろう。そう考えればそろそろ潮時なのかもしれない。

「あー、例の件か？」

俺は思い切って聞いてみた。

風夏は小さくコクンと頷いた。

俺はふうーと溜め息を吐いた。

観念して俺は告白する。

「俺の母さん……………」

くそー、言葉が続かない。まじ俺情けないぜ。そう思い俺は顔をしかめた。そして目を閉じてもう一度言う。

「俺の母さん、……………吸……………」

…魔力種なんだわ」

ふうーと重い溜め息が漏れた。

やっと言えた。しかし目が開けられない。風夏の顔を見るのが怖いんだ。

……………
……………
……………

カチカチカチカチ……………

風夏は何も言ってくれない。しかし何か音が聞こえる。なんの音だ？

俺はそつと目を開け、そして横に座る風夏に視線を向けた。

風夏の歯がカチカチ音を立てていたのだ。身体全体を小刻みに震わせている所為だ。

そして俺の視線に気付いたのか、風夏もゆっくりと俺に視線を向けた。

視線がぶつかった瞬間、風夏は飛び跳ねるようにベッドから立ち上がった。

風夏は両腕で自分の身体を抱きかかえるようにして震えている。

濡れた髪で、ぶるぶる震え、怯えきった表情。

まるで嵐の夜に捨てられたダンボールの中の子猫を見ているようだった。

……………

っふ……………

何故だろう？ 俺の口からそんな嘲笑するような声が発せられた。顔も幾分笑みを浮かべている。

そして俺は立ち上がった。

風夏が一步後退る。

「嫌…… 見ないで……」

そんな風夏の声が俺の脳裏に聞こえてきた。

俺の魔力が極度に強まり、リングの制御を超えたのだ。もちろん風夏のリングに内蔵されている防御機能のそれも俺の魔力を防ぐ事は出来ない。

たまに感情が高ぶると無意識で魔力が強まってしまつたのだ。

俺は意識して魔力を抑えた。

今ほどこの魔力を恨めしいと思つた事は無い。

この世で一番聞きたく無かつた相手の言葉を聞いてしまつたから

……

俺は水月邸をあとにした。

外は大雨だつたが傘なんて持つていない。

季節は1月、今日は冷え込みも厳しい。宵のうちに雪へと変わるんじゃないだろうか？ 明日の朝には辺り一面の雪景色が見れるかもしれない。

そんなことをふと考えて、1人マンションへと向かつていた。

1月の雨は冷たかつた。追い討ちを掛けるように俺の身体を芯から凍えさせてくれた。

だが、今はそんな雨もありがたかつた。

とめどなく流れ落ちる涙を洗い流してくれるからだ。

かれこれ10年以上、俺は泣いた記憶が無い。母親が死んだ時も泣かなかつた。母親のことは好きだつたが、吸魔力種だと知つてそれどころでは無かつたのかもしれない。ただ感情に欠しかつただけ

かもしれないが、どっちでも良い事だった。
そして俺は母親を恨むようになっていた。

希望と期待。僅かながらにそんな物を持っていた。
風夏なら受け止めてくれるかもしれない。という期待。
風夏にだけは見捨てられたく無い。という希望。

自分の考えの甘さに反吐がでる思いだった。

そして気が付くと、俺は道端で屈みこんで胃の内容物を吐き出し
ていた。

それと同時に全ての憎しみ恨み悲しみも吐き出していた様に思え
た。

全て吐き終え、ふと横を見ると段ボール箱が捨ててある。耳を澄
まさないと聞こえないような小さな鳴き声が俺の耳に届いた。真横
で屈みこんだから聞こえて来たのだろう。

中を覗くと小さな真っ黒い子猫がふみゃふみゃと鳴いていた。雨
に濡れてぶるぶる振るえ怯えきっている。その姿はさっきの風夏の
様だった。

俺は躊躇いながらもその子猫を抱き上げていた。

「ふみゃ……………」

俺の目からもう涙は枯れていた。

2話 + (風夏視点) (前書き)

ジンと風夏の会話。

風夏視点です。

2話+（風夏視点）

お風呂から上がったわたしは濡れた髪もそのままにジンが泊まる部屋を訪れた。

もちろんお風呂が開いた事を教えるために。

でもジンの顔を見ると、急にあの件を思い出し、お風呂のことを言い出せなかった。

口からでた言葉は「ちょっといいかな？」

ジンは気持ち良くわたしを部屋に入れてくれた。

わたしは今まで何度となくジンに例の件を聞いている。でもジンは教えてくれなかった。

しつこい女だと思われてるんだろーなと思いながらも聞いてしまっ
う。

わたしはジンが悩んでる姿なんて見たくない。辛そうな姿なんて見たくない。

何でも話して欲しい。わたしを頼って欲しかった。

どうやって聞こうか。それともジンから話してくれるまで待つ
うか。

そんな事を考えていたら、ジンから切り出してくれた。

「あー、例の件か？」

わたしは小さくコクンと頷いた。

ジンはふうーと溜め息を吐いて語りだしてくれた。

「俺の母さん……………」

そこでジンの言葉が途切れた。言い難そうだけど、わたしは黙っ
て待つ事にした。

「俺の母さんな……………吸……………」

…魔力種なんだわ」

キュウ、マリヨクシュ……………？

一体何を言ってるの？

キュウマリヨクシユ……………それってヴァンパイア？

嘘……………あのプラチナブロンドの髪と、綺麗な碧眼のお母様がヴァンパイア？

わたしの憧れの女性がヴァンパイアだなんて……………

そう言えば、ヴァンパイアって類稀なる美貌を兼ね備えているって聞いた事がある。お母様もうつとりするくらい綺麗だった。ジンだって髪は銀だけど線の細い綺麗な顔立ちをしてる。

じゃあ、ジンも……………？

でも、ヴァンパイアって普通の人から魔力を吸い取る恐ろしい人種だって聞いている。

嫌だ！ わたしは何を考えているの？ お母様はお母様よ。怖いところなんて一つもなかった。いつもわたしに優しくかわ。

身体がぶるぶると震えだした。

わたしは必死の思いで恐ろしい考えを脳裏から打ち払おうとした。ジンはその後、黙ってしまった。わたしの言葉を待ってるの？ たったそれだけの告白でなんて答えればいいの？ なんとか言うてよ……………

わたしはそんな思いで、そっとジンに視線を向けた。

ジンもわたしを見ていた。真っ赤な瞳で。

わたしは、すぐ目の前にジンの顔があることに驚いて立ち上がってしまった。

でもジンは、そうは思っていない。顔を見ればすぐ分かったわ。

絶望したような瞳だった。

なんで？ わたしは一瞬わからなかった。

でも、考えれば簡単だった。ジンは自分がヴァンパイアだという事を恐れている。わたしだって自分がヴァンパイアなら怖いと思う。だからわたしがジンに対して、怯えて逃げたと思ったんだ。だからジンがわたしに絶望したんだ。

違うの！ わたしはジンを怖いとか思った事ない。そう叫びたか

った。

わたしは怖くなった。ジンに絶望される事、ジンに嫌われる事が、怖くてなまらなかった。

身体がぶるぶる震える、必死で両の手で身体を押さえても震えは止まらなかった。

ジンが薄っすら笑みを浮かべて、ゆっくりと立ち上がった。

でもその笑みが怖かった。わたしは一步後退ってしまった。

嫌だ。そんな絶望したような目で私を見ないで。わたしを嫌わな
いで……

わたしは祈るような思いで目を閉じ、ただただ震えるだけだった。

そしてジンが部屋を出て行ったことすら気が付かなかった。

気が付いても追い掛けられなかった。

またあの目で見られるのが怖かった。

そして翌日、いつも一緒に歩く学校までの道のりを1人出歩いた。学校に着いてもジンは居なかった。結局ジンは学校を休んだようだ。でもわたしは連絡さえ入れなかった。

一緒に部屋を片付けようと約束したのに、わたしはマンションに行かなかった。いえ、行けなかった。ジンに会うのが怖かった。あの目が怖い。どんな罵声をあびせられるかと思うと怖くて電話すら出来ない。

ジンを傷つけてしまったのだから、どんなに罵られたって仕方が無いのは分かってる。

許してくれるならどんな仕打ちでも受け入れる。でもあの目は……完全にわたしを軽蔑していた。わたしに絶望していた。どんなに謝っても許して貰えるとは思えなかった。

そして翌日もその翌日もジンは学校に来なかった。

3話

ジンが目覚めたのは翌日正午近くだった。

視界に映る天井は、いつも見ていた天井とは違っていた。ジンはそこで邸からマンションに引越した事を思い出す。

(そうか、邸を追い出されたんだっとな)

ふと脳裏に風夏の顔が浮かぶ。だがその顔は驚愕に満ち、双眸には涙を湛えていた。ジンを嫌悪する眼差しだった。だが、それだけである。ジンにはなんの感情も湧いてこなかった。

そして視界を巡らせた。

.....

(ここはどこだ……?)

視界に映るそれは、ジンが引越したマンションではなかった。壁紙の色とかははっきり覚えていないが、家具類や調度品が見たことも無い物ばかりである。

ゆっくり身体をベッドから起こす。

ふと背後から人の声が聞こえた。

「あら、お目が覚め、気分はどうかしら？」

優しそうでとても綺麗な声だった。

ジンは声のした方に視線を向けた。

そこにはソファアに座る二十歳前くらいの美しい女性が座っていた。

プラチナブロンドの髪、切れ長の碧眼、透き通るような真っ白な肌。稀に見る美女である。

「えっと……」

ジンは言葉に詰まった。なにがなんだか分からないからだ。

その美しい女性は微笑を浮かべ、小さく首を傾げた。いかにも、『どうしたの?』と言った感じである。

ジンは記憶を辿ってみた。

たしか、……風夏に告白して、そのまま邸を出た。

……大雨だった。

……俺は道端で吐いて、横に子猫がいた。……その子猫を抱き上げた。

「あ、猫。たしか黒い子猫が……」

「あら、この状況で最初の質問がそれ？」

そう言っつてその美女はクスクス笑い出した。

たしかにそう言われれば可笑しいかも知れない。

「そこよ」

その美しい女性が指差す先、部屋の片隅で子猫は何かを食べているようだ。

「今、ミルクをあげたのよ。なかなか飲んでくれなかったんだけど、やっと飲んでくれたわ」

そう言っつて猫を見つめる女性の視線は、どこか慈愛に満ちている様に思えた。

「えっと、あ、ありがとう……」

ジンはしどろもどろにお礼を言った。

「どういたしまして」

にっこり微笑み言葉を返す女性。そしてそのまま言葉を続けた。

「……とりあえず自己紹介いいかしら？」

「え、あ、ああ……」

「ふふっ、じゃ私からね？ 私はアリス、見たとおり日本人じゃないわ。年齢は……ナイシヨ　じゃ次は貴方の番ね」

結局分かったのは名前だけ。それもフルネームではない。

それよりもジンはその美しい容貌、プラチナブロンドの髪、碧の瞳から母親と縁のある者かと思ったのだ。だが母親の結婚前の名前はカーラ・ニコル・ウィンターだったはず。アリスだけでは判断が出来なかった。

「じゃえっと、俺の名前は、……」

ジンは一瞬戸惑った。鳴神を名乗るべきかどうか。別に隠すつも

りはないが、鳴神家を追い出された人間として悩んだのだ。

「名前はジン、十五歳」

相手が名前しか名乗らないのだ、こちらは年齢まで言っている。文句は無いだらうと判断したのだ。

「そう、ジンね……」

それだけ言うと、またクスクス笑い出す。

そのアリスの瞳は全てを見透かしているように思えた。

「じゃあ、ジン、他に質問は無いかしら？」

「あ、ここは何処……ですか？」

「ふふつ、敬語は必要ないわよ。それと名前もお互い呼び捨てでいきましょ？」

優しい声音だが、どこか強制力があり、素直に従いたくなる。その美貌がそうさせているのかもしれない。とジンは思った。

「わかった。で、此処は？」

「あら、ごめんなさい。ここは私の家よ。私はここで1人暮らしをしているの」

終始笑顔で語るアリス。

「そっか。じゃあ、なんで俺が此処で寝てた？」

「覚えてないのね…… 貴方、昨晚この近くで行き倒れたのよ？ それをわたしが見つけて介抱したってわけ。 着替え大変

だったんだから……」

アリスは何故かそこで顔を赤らめた。

ジンは訳が分からず、首を傾げたが、ふとあることに思い巡らせた。そして布団をめくると自分の衣服を確認する。なんと

女物のネグリジェ、しかも透けている。下着は着けていないようだ

……

「あ、ああ……そ、そ……こ、これ……」

ジンは完全に舞い上がってしまった。

「ふふつ、安心して電気を消して真っ暗の状態を着替えさせたから、なにも見てないわ」

それを聞いたジンは大きな溜め息を洩らす。

「ふうー」

しかし女物のネグリジエは恥ずかしすぎた。

ジンはそそくさと着替え、アリスにお礼を述べると、黒猫を抱いて部屋を出た。

部屋を出ると見覚えのある建物構造が広がっている。

ふとアリスが住む部屋の部屋番号を確認すると5007号。

ジンの部屋は5008号である。

今まで気がつかなかったが同じマンションの隣室だった。

(まさかこれが偶然……?)

母親とそっくりの髪と瞳。

どこか馴れ馴れしい態度。

全てを見透かすような瞳。

その上、同じマンションの隣室。

だいたい、見ず知らずの男を部屋で寝かせるか？

ジンは考えるのをやめた。

どうせ隣室である。その内謎も解けるだろうと思ったのだ。

4話

自室に帰ったジンは早速部屋の片付けをすることにした。

リビングの中央に置かれた冷蔵庫、本棚、応接セット等々。さらに積み上げられているダンボール類。洋間にはベッドと机、中央に同じくダンボールが積まれている。

ここに荷物を運び入れた業者が、後で移動しやすいようにと真ん中を集めて置いてくれたのだろう。更に部屋割りを考慮し、ベッドは洋間、冷蔵庫はリビングなど、一応考えて置いてくれたようだ。

しかし、このままでは生活が出来ないので適当に配置を考える。

ベッドを窓際……机を……本棚はソファの近くがいいかな

……

- 思索すること数分。

配置が決まれば移動である。

大きな荷物を1人で動かすにはちょっと骨が折れるので魔法を使う事にした。

床を引き摺るなどすれば1人でも可能なのだが、魔法レベルがある程度高い者は魔法を使う方が楽なのだ。

そこで頭に装着したリングを外す。

リングとは、もちろん魔力制御装置のことだ。

魔力制御装置は電気信号を脳波に送る事で魔力（力量）を抑える仕組みになっている。その為頭から外すとその効力は失われ魔法を自由に使う事が可能となる。しかし、魔力制御装置内部に組み込まれた魔法防御機能は対外的な魔法に働く物であるため、所持していればその効果が失われる事はない。

つまり外からの魔法攻撃（読心、透視などを含む）はシャットアウトし、自身は自由に魔法を行使出切るわけである。

大きな荷物、1人で抱えきれないような家具類は、無詠唱の物質

魔法を使う。

昔で言うサイコキネシス（念動力）と言った物の事だ。念動力と言うのはその名の通り、手を使わず念じて物を動かす力である。

魔法は大きく2つに分けられている。それが詠唱魔法と無詠唱魔法だ。

『詠唱魔法』

使う過程において、少々面倒な術式を必要とする魔法である。

術式と言うのは、言葉や文字を使用し魔法陣を形成することである。

そのメリットは、魔法の組み合わせが可能で、強力な魔法を行使できる事にある。

デメリットは、複雑な術式を必要とし、魔法発動までに時間が掛かる事である。

主に魔力を物質に変化させたり、非物質である空間などに作用する魔法がある。

『無詠唱魔法』

体内の魔力を直接使用する魔法である。

そのメリットは、術式を必要とせず、瞬時に発動が可能な事など。デメリットは、膨大かつ強力な魔力を必要とする場合が多い事があげられる。

主に、自身の筋力強化や、念動、浮遊などがある。

更にその魔法は『物質魔法』『時空魔法』『属性魔法』の3つに分類されている。

『物質魔法』

物質に直接作用する魔法のことを云う。

人体に魔力を注ぎその細胞の配列を変化させ怪我を治療、形状を変えたりする。また対象の卑金属の原子結合を変化させ貴金属に変

える錬金などや、物質自体を動かすサイコキネシスなどもこれにあたる。

『空間魔法』

空間に作用する魔法をの事を云う。

魔力により空間を歪め異次元から異界の生物、精霊、悪魔、神と呼ばれる存在の召還する他、空間を移動する瞬間移動などもこれにあたる。応用すれば時空も移動出きるかもしれないが、今はまだ成功例はない、とされている。

『属性魔法』

4つの属性に作用する魔法の事を云う。

かつて4大元素と云われた火、風、土、水を操る魔法である。

しかしこれらは物質魔法の応用であり、物質魔法に分類される気配が高い。

ただ今は便宜上、上記の様に分類されているだけで、今後の研究結果如何によってどうなるか分からない。

もちろん上記の魔法を同時に使う事も可能である。その為には複雑な術式が必要となるが、まだまだ未解明の部分が多く更なる研究を必要としているのも事実である。

最後に一番大事なことだが、これらの情報はあくまで国際魔法研究機構（ISRO）が発表していると言う点にある。

全世界各国は独自の研究を進めている。そしてその内容を多くは公表していない。

つまり、国により意見や見解は違い、さらに研究は日々行われ今現在でもその内容は変わっているかも知れないという事だ。

そして今、ジンは無詠唱の物質魔法でダンスやベッドを

動かしてた。

ジンの魔力（力量）は絶大である。少量の魔力で楽々とそれらを動かす事が可能なのだ。しかし元々の蓄積量が少ない為、すぐ枯れてしまう。完全に枯れてしまうと動く事もまま成らぬ状態になり、死に至る事もある。

大きな荷物を全て動かし終わると、すでにヘトヘト状態だった。

ジンは肩で息をしながら休憩し魔力回復を待っていた。

ピンポーン！

そこへドアフォンの音が部屋に鳴り響く。

誰だろうとモニタを覗くと、そこにはアリスの顔があった。

先程アリスから逃げる様に帰ってきた手前、顔を合わし辛いと思っただものの、一方的に世話になりっぱなしなので、無視するわけにもゆかず、対応に出た。

「はい、なんでしょう？」

訝しむジンに対して、アリスは笑みを湛えている。

最初は優しく慈愛に満ちた笑顔だと思っていたが、今は妖艶な笑みに見える。

「つつふふ、敬語はいらないのに……まあいいわ、ちよつと開けて貰えるかしら？」

ジンは母親を思い出すアリスの外面的要素に懐かしさを覚えるものの、その若く美しい表情、艶かしい色気に苦手意識が芽生えている。

が、断るわけにもゆかず素直にドアのロックを解除する。

「あら、まだ片付け終わって無いの？ そろそろ終わった頃だと思っってお茶しに来たのに……」アリスは残念そうに口を尖らせ眉間に皺を寄せている。

「ジンは、ほつとけよ！ と思うものの答えは返さずスルーと決め

た。
（てか、なんで片付けの事しってるんだ？）

「それより、とても疲れているようなね？　いいわ、後はわたしがしてあげる」

アリスがそう言うと、たちまちダンボールに詰まった小物が空を飛び、記載された通りの位置に収まっていく。記載とはもちろんダンボールの上面に書かれた『本棚何段目』『机の引出し』などのことだ。ジンは言葉を挟む暇もなかった。というか、今は口を開き呆然とそれを眺めている。

そのあまりの速さ、正確さに驚愕しているのだ。

実際、無詠唱の物質魔法で、物体を正確な位置に動かすのは難しいのだ。とくに狭い位置に動かすのは至難の業である。

例えるなら、巨大クレーン車で小さな本を一冊ずつ本棚にしまう様な感じ、だと言えば分かって貰えるだろうか？

魔力が強すぎると物体を破壊しかねない。さらに移動させる位置がずれば、衝突による破損もありうるのだ。しかしアリスは意図も間単に高速で片付けている。

よほど熟練の魔法使いでなければ不可能だろう。

もしジンが同じ作業をすれば数十倍以上の時間が掛かっただろう。いや、途中で魔力が切れているだろうが……

そして数分後には全て綺麗に片付いてしまった。

アリスはにっこり微笑み「これくらいでいいかしら？」とジンに問いかけていた。

まるで魔力を消費しなかったかのように、息一つ乱していない。

ジンは驚きのあまり、首を立てに振るだけで、ろくに返事も出来なかった。

5話

部屋の片づけが終わると、アリスがコーヒーを入れ始めた。

俺はアリスの指示でソファに腰を降ろし、それを待っている。

アリスは俺の部屋に始めて来たわけだが、片付けたのはアリスだ。『勝手知ったる他人の家』とはこの事だろうか？ などと俺は漠然と考えていた。

いや、そんな事でも考えなければ、扇情的な後姿に目を奪われ固まってしまうからだ。

コーヒーを入れ終えたアリスは、俺の横に座ってきた。

なぜ横に？ 前に座れよ……

アリスは長い脚を組んでいるが、短いスカートから伸びる白く細い脚が妙に艶かしい。

その上、組まれた腕により胸の膨らみが異様に強調されている。

俺は出来るだけ視線を真っ直ぐ前に固定しようと必死だった。

少しでも視線を向けると胸の谷間と白い太腿に視線を釘付けにされそうだからだ。

横でよかったかも知れない。前に座られると目のやり場に困っていたところだ。

これはあくまで俺の推測だが、アリスはそんな俺を見て楽しんでいるような気がする。

気のせいだと思いたいが……

アリスは白く細い手をそっと俺の方に伸ばしてきた。そして俺の手を優しく包み込む。

ゴクッ！

俺は思わず唾を飲み込んだ。心臓の鼓動が高まる。額にも汗が滲む。

「そんなに怖がらなくてもいいのよ？」

アリスは妖艶な笑みを浮かべ俺の耳元で囁き掛ける。吐息が耳に触れる。

俺は思わず身震いをしそうになる。

「私の……をあげる」

あげる？ なにを？ 俺は大事な部分を聞き逃した。いや、ワザと大事な部分を声に出さなかった様に思えた。

「つぶふ。これ以上苛めると可愛そうね」

苛める？ ってことはやっぱりワザとか…… このやるお、マジ襲うぞ……

そう思った時、思いがけない言葉がアリスの口から発せられた。

「吸っていいわよ」

「えっ！」

俺は、照れも怒りも、なにもかも吹っ飛んだ。

「ま、りよ、く。 吸っていいわよ」

「ど、どうしてそれを……？」

「説明は後よ。ちよつとは回復しないと、私を襲うことも出来ないわよ？」

「なっ…… よ、読んだのか……」

「いいえ、貴方の顔に書いてあるわよ。ふふふっ」

そう言っって声を出して笑うアリス。俺は思わず赤面してしまった。だが、アリスの次の発言で俺はまたも驚愕させられる。

「だいたい、リングの防御を破って読むなんて事、出来るはずないでしょ？ そんな事が出来る人はジン、貴方以外に私は知らないわよ」

俺は言葉を失う。

なぜそんなことまで知っているのか。

「まあ、驚いてないで、先に吸って頂戴。説明はその後って言った

でしょ？」

「あ、ああ……」

俺は言われた通りにすることにした。

何もかもお見通しらしい。ならば説明を待つしかない。

そして俺の体が薄赤いオーラに包まれる。とは言っても余程魔力が強い者にしか見る事の出来ない程度のオーラだ。

しかし瞳は別である。普段は琥珀色だが魔力を吸う時に、その瞳の色が変化する。

誰の目にもはつきりと分かる真紅の瞳に。

吸魔力種。異名ヴァンパイア。

またの名をクリムゾン・アイ。

その真紅の瞳が所以であった。

俺は魔力を吸い終わると、アリスより全てを知らされた。

俺の予想通り、アリスは母親の縁も者だった。

本名、マルティナ・アリス・ウィンター。俺の母親の妹だと言う。つまり俺の叔母。

「言っとくけど、叔母さんとか言ったら殺すわよ！」と脅されたのは言つまでもないだろう。

なぜ、ミドルネームを使うのか？ ただ好きだかららしい……

そして此処からが重大な事だった。

なぜ、このマンションに住んでいるのか。

アリスはルークシア王国王女、クラリスの側近を勤める立場にあるという。

ルークシア王国は北欧の小国にして強国。近年レアメタル産出で日本と外交を結び、王女は高校進学と同時に憧れのオタク国、日本に留学するのだという。

そしてアリスはクラリス王女の護衛として先立って日本に滞在しているらしい。

だが、学校内では護衛に付く事が出来ない。それで学校内での護衛に俺に付けと言うことだ。もちろん、このことは親父にも知らされている。

つまり俺は高校入試失敗が原因で追い出されたわけではなく、王女護衛の為にアリスの隣室に住むことを強要されたらしいのだ。

なぜ隣室？ という疑問には、

「護衛には連携が必須よ。出来るだけ近くに居た方が便利なの。それに貴方もあの人の近くより私の傍で暮らすほうが良いでしょ？」と笑顔で言われてしまった。

もちろんあの人とは、継母のことである。

そして俺に言い返す言葉など皆無だった。

だが、俺はふと手紙の内容を思い出し、ある疑問が脳裏をよぎる。疑問とは鳴神邸への出入り禁止と、問題を起こせば縁を切るという2点だ。

そしてその疑問をアリスにぶつける為、邸を出る直前のやり取りとを教え、手紙もアリスに見せた。すると

「ああ、貴方のお父様にも、『私から話するから何も言わないでと頼んでおいたの。もちろんこれは極秘な事だから、あの人にも知らせてないわ。だから勝手に解釈して喜んでるんじゃないの？ あの人貴方を嫌ってるものね。ほほほっ」と来た。

もう一度念を押すが、あの人とは、継母のことである。

俺は一瞬、目眩とともに頭痛に襲われた……

そして高校入試。まさか誰一として俺が人不合格になるとは思っていなかったらしい。

今は急遽、2次試験で確実に合格できるように裏で手を回しているとのことだ。

そして次の日、俺の部屋のリビングの壁に穴が開いた。

アリスが自分の部屋と行き来可能にする為だと、業者を頼み壁を壊したのだ。

もちろん俺は抗議した。 しかし。

「あら、食事もわたしが作ってあげるし、魔力回復もしてあげるのよ。それでも不満だと言うのかしら？」

と、アリスは不遜な態度で言い放つ。

それでも俺は抗議を続けた。

「いや、男と女が一つ屋根の下って不味いだよ」

「子供が何いつてるのよ。それに甥と叔母でしょ。 それと

も貴方は叔母に欲情するのかしら？」

口角を吊り上げ、冷笑を浮かべながら見下すように俺を侮蔑する。

こいつは、人に叔母と呼ばせなくせに、自分では平気で叔母叔母言いやがって……

そして俺は失言した。

「ふん！ 誰が年増の叔母に欲情するかよ」

もちろん腕力で俺が負けるとは思っていない。

魔力だつて今はフルにある。そう簡単に負けないだろう。

しかし いきなりベッドに押し倒され上に跨るようになりかかられた。

「なんですつて？ 叔母？ わたしの魅力に何も感じない？ ならもつと魅力を見せ付けてあげようかしら？ 『叔母を襲つた変態』

の2つ名、付けてあげてもいいのよ？」

言下に豊満な胸を俺の顔にじわじわ近寄せてくる。

『甥を襲つた変態』はおまえだろう！ と心で叫ぶが口には出せなかった。

俺が叫んだのは謝罪の言葉だった。

その後、俺は小一時間土下座させられた……

6話

結論から言えば、ほぼ同棲の状態に落ち着いたわけだ。

俺がアリスに抗議したのも本心からではなく照れからである。もちろん困る部分が無いわけではないが、家事全般を任せられる金髪美女との同棲を、真に嫌がる男子中学生はそうは居ないだろう。

同棲を夢見る年頃なのである。そう　　現実の同棲がどんなものか知らない、純真な心を持っていたのだ。

俺がこれからの甘い生活を少し妄想していると、急にアリスに声をかけられた。

「ジンのIDカード、見せて貰えないかしら？」

ここで言うIDカードとは、国際魔法研究機構（ISRO）が各国に推奨している、特定個人の、魔法に関するあらゆる情報が記憶されたカードの事だ。

ISROはあくまで推奨しているだけで、実際の管理は各国がそれぞれ行っている。

では、なぜISROは推奨するだけで管理を行わないのか。当然のこととして各国がそれを拒否しているからだ。各国は自国の魔法使用の情報を他国に知られたくないのが現状なのだ。

そしてIDカードの所持についても各国の法律はそれぞれである。ここ日本では取得の義務は16歳からと成っていた。

「いや、まだ持ってない。高校入学で学校側が作ってくれるはずだ
けど」

「そうなの、なら調度いいわ。ちょっとこっちに来てくれるかしら？」

「こっちと言うのはアリス側の部屋である。」

俺はアリスに続いてリビングに入った。更にそこから玄関へと向かう廊下にでる。すると扉が4つあった。1つはトイレ、もう1つは洗面か？ じゃあ、あと2つはなんだろう？

別に詮索するつもりは無かったのだが、ちよつと気になり聞いてみた。

「あれ、こつちは1LDKじゃないのか？」

「ええ、もちろん違うわ。3LDKよ？」

アリスは、さっき見たでしょ。今更なに言っているの？ といった表情である。

俺は慌てて飛び出したから、まったく気が付かなかった。

というか、同じマンションだとも思っていなかったわけだし、いちいち部屋の数や間取りなど気にしてもいなかった。

そしてアリスがその扉の1つをあける。

部屋は洋間で10畳くらいだろうか？

これといった家具は何も無いが、なにやら大きな機械らしきものが、部屋のだ真ん中に置いてある。俺はその形状からある物を予想して聞いてみた。

「なにこれ。日焼けマシン？」

俺は素で聞いた。

吹き出すアリス。

「違うわよ、わたしの肌の日焼けの跡なんてないでしょ？」

たしかに、アリスの肌は透き通る様に白い。この美しい肌を焼くなど宝石をどぶに捨てるようなものだ。

アリスは俺が肌に見とれている事など意に介さず、言葉を続けた。

「これはVRMTSよ」

「VRMTS？」

「そう。VRMTS。VRはバーチャルリアティーね。MTSはマジックトレーニングシステムの略。日本語で言うなら、

そうね、仮想空間での魔法トレーニングマシンってどこかしら？

日本ではまだ実用化されてないはずよね」

「VRつて、軍隊とかで採用されてたやつ？」

「そうそう。まだ一般には出回っていないのだけれど、わたしの国、ルークシア王国ではすでに軍や魔法警察で実戦訓練用に大いに役立つっているわよ？」

VRMTS（仮想空間魔法訓練装置 Virtual reality magic training system）

「コンピュータグラフィック」

CGなどを用いて造られた3次元の仮想空間に、こちらもCGで造られた使用者自身の分身を置き、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、痛覚、温度覚、体性感覚、平衡感覚など、様々なインターフェースで使用者と繋がり、使用者は、あたかも実体験しているような感覚を得られることが出来る。更に、現在解明されている全ての魔法もインプットされ、使用可能となっている。

訓練は主に対戦で、使用者の魔法レベルにより、様々な地形、様々な敵が出現し、それらを倒していく事で魔法の熟練度をあげる。というシステムである。

ちなみに痛覚などの身体に多大な影響がある物は軽減されているらしい。

「つまり、この機械（VRMTS）を使えば仮想の空間に行つて、魔法を自由に使えるってことか？」

「まあ、簡単に言えばそうね」

「じゃ、魔力は？ 仮想空間でも魔法を使えば減るのか？」

「いいえ、実際に魔法を使ってる訳では無いから減る事はないわ。でも使用者の魔力は力量、蓄積量など、すべて数値化されるの。システム内部 つまり仮想空間ね。そこで魔法を使えば、それに応じてその数値が変化していくの。だから蓄積量が0になれば仮想空間内でも魔法は使えなくなる。もちろん休憩していればその数値も回復するわ」

「なるほど……」

俺は心底感心していた。すごいシステムだ。

実際、現実世界では魔法の訓練は中々難しい。個人の魔力にもよるが、ある程度高レベルの者が使う魔法は、重火器並みかそれ以上の破壊力を生む。そんな魔法を訓練できる場所など街中に存在しない。

樹海並みの私有地があれば別だが……

軍に入るなどすれば、それなりの訓練場所もあり、可能となるのだが、それでも年間何人もの死亡事故が発生している。だがこのシステムならば好きな時に好きなだけ訓練が出来るわけだ。

「だけど、さつき軍や魔法警察で使ってるって言ったよな。それがなんで此処にあるんだ？」

アリスは含み笑いを浮かべている。

普通の奴が同じ笑いを受けべたら、憎らしく思うだろうが、アリスほどの美人にそれをされても腹が立たない。というか、初めて見る表情は、どんなものであっても見とれてしまう。

美人は得だなあと、つくづく感心させられた。

そして俺は風夏の顔を思い出す。あいつもどんな顔をしてても可愛かったな、と……

だが最後のあの顔だけは2度と見たくなかった。

ふと気が付くと、アリスが首を傾げている。

俺は知らず知らずに表情に出していたようだ。なんとか誤魔化す言葉を考える。

「えっと……」

するとアリスが俺の質問をスルーして話題を変えてきた。

「あなたに一度これに入って欲しいの」

俺は別にどうしても知りたいわけでも無かったので、そのまま話を進める事にした。

「訓練しろってことか？」

「いいえ、まあ訓練もして貰うけど、とりあえずあなたの魔力その他の能力を把握しておきたいってところかしら？」

「なるほど、さっき言ってた数値化のことか。べつに良いけど、その代わりアリスのIDカード見せてくれ。それが条件だな」

アリスは一瞬意味ありげな表情を見せたが、すぐに了解をしめした。

「ええ、いいわよ。他ならぬジンだものね」

俺はその言い様と表情に少し疑問を覚えたが、とりあえず見たいと言う好奇心が勝り、即座に手を出していた。

「じゃ、先に見せてくれ」

アリスから手渡されたカードはカード型端末になっていた。タッチパネル形式で、画面には項目毎のアイコンが表示されている。

俺は適当に左上からアイコンに触れていく。

最初に表示されたのはアリスの写真であった。

胸部より上が写った顔写真。澄ましているがやはり美人である。

服装は胸より上だけだが、白地に金ボタンの付いた詰襟で軍服の样にも見える。

そして隣のアイコンに触れる。

次に表示されたのは、

ルークシア魔法免許証 (r u x s i a m a g i c p e r m i t)

取得番号 R X 1 2 3 4 - X X

取得日 2 0 X X 年 4 月 X X 日

現住所 X X X X X X X X X X X X X X

氏名 マルティナ・アリス・ウィンター

生年月日 2 0 X X 年 X X 月 X X 日

性別 女

魔法レベル A

力量レベル S (1 0 5 8)

蓄積レベル I (0 《ゼロ》)

魔法レベルと力量、蓄積レベルについて少し話しましょう。

力量レベルは以前にも少し触れたが、S A B C D E F G H Iと10段階に分かれている。魔法蓄積も同じである。そして魔法レベルはその両方の合計値より算出される。

細かい数値はその都度説明するが、力量1000を超えればレベル「S」である。

そして10以下は「E」となる。これがアリスの力量と蓄積のレベルである。

ちなみに力量が1000を超える者は日本には居ないと言われている。全世界で見ても、数人しかその存在は確認されていない。もちろん公式発表が無い上、各国はそれを隠しているだろうから、事実は闇の中にあるのだが……

俺の知る人物を例にあげるなら親父である。

俺の親父は、日本でも屈指の魔法使いである。その魔力も日本でトップクラスと言われている。それでも、たしか600台だったはずである。

つまりアリスの1058と言うのは異常である。吸魔力種であるが故かもしれないが、それでも異常だろう。まあ俺の異常さに比べたら可愛い物かもしれないが……

もちろんレベル「強さ」ではない。

魔力をどれほど上手く使いこなすかでその強さは変わってくる。

その為の訓練がVRMTSなのだろう。

俺はさらにじっくりカードの内容を見ていく。

そして生年月日から年齢を算出した。なるほどアリスの年齢は19歳か。

さらに記載は続いているようだ。俺は画面をスクロールしてみた。そこには身長体重からスリーサイズまで記されている。

俺は思わず『閉じる』アイコンに触れた。

冷や汗が少しにじむ。

アリスに視線を向けるとなにより意味ありげな笑みを浮かべていたが無視することにする。

俺は素知らぬ顔でアリスにカードを返した。

一瞬、妙な間があったものの、結局アリスは、俺が体重やスリーサイズを見たことに対して何も触れては来なかった。

俺は自分が意識し過ぎていただけかと、ほっとして話しを進める。

「じゃ、その機械に入ればいいんだな？」

「ええ、じゃ準備するわね」

アリスはそう言っただけにやらVRMTSを操作し始めた。

ウィーンと小さな機械音が聞こえてくる。どうやら電源を入れたようだ。さらに様々な色のランプが各所で点滅、点灯を始める。続いてカチャツと言っ音の後にVRMTSの上面が上に持ち上がり、中から身体を包み込むようなベッドが現れた。

.....

どうやら準備は終わった様で、アリスが振り向き俺に声を掛ける。「準備できたわよ。じゃここに寝てくれるかしら？」

俺は頷いて、言われたとおり機械の中で横になる。

ちなみに仮想空間ではリングは意味を成さないらしい。魔力制御もなければ防御機能も働かないという。

ゆっくと上面が閉じられると、中は真っ暗である。

『じゃ、わたしがスイッチを入れたら数秒後に仮想空間に立ってることになるから、あとはシステムの指示に従って行動してね。とりあえず最初のミッションだけ試してくれば数値が計測されるからあとは好きなとこまで進めてくれても良いし、その場で終わっても良いし、お任せするわね』

脳裏に直接アリスの声が聞こえてきた。俺は頭の中で返事をする。

『了解！』

7話

カチツ！とスイッチが入る音が聞こえた。

ほんの一瞬のことだが、頭天边からつま先に至るまで、微量の電流が流れたような感覚に包まれた。痛いとか痺れるとかの感覚は無く、そう感じただけかもしれない。そして背中に触れるベッドの感覚が薄れ、浮遊しているかのような錯覚に陥る。と同時に意識が次第に薄れ消えていく。

気が付くと俺は地面に立っていた。

周りを見回すと全面壁に覆われた室内である。

とは言っても体育館くらいの広さがあるだろうか。

CGを使って造られた空間だと言っていたが、まるで本物の体育館の中に居るようだ。俺自身の身体を見ても、CGとは思えないほどリアルである。身体に触れてみても何の違和感も感じない。どこをどう触っても俺の身体である。

ただ、一切音が聞こえ無い。その点だけが現実とは違うんだと認識できた。

しかしそんな静寂も直ぐに終わりを迎えた。

まるで少女の様な声が、脳裏ではなく背後から耳に響いた。

「ヨウコソ！ VRMTSノ世界へ！ ガイド件サポート役ヲ務メル『ティナ』トモウシマステス！」

振り向いた俺の目の前には、真っ黒なドレスに身を包んだ金髪の少女が、恭しく礼をしていた。そして顔を上げたその少女は、まるでアリスを12歳くらいにした様な小さな美少女だった。

「ヨロシクナノデス！」

不思議そうに首を傾げる美少女ティナ。

俺がその美少女に呆気にと取られていると、脳裏に声が響いた。

「ティナは出てきたかしら？ どう、気に入って貰えた？」

やけに楽しそうな声のアリスである。

「……………ヨロシクナノデス！」

ティナはまだ挨拶をしているが、とりあえずアリスとの会話を優先する。

「ああ、今、目の前にいるよ？ この娘は何？」

俺は声に出さずに頭の中でアリスに聞いた。

「自己紹介したでしょ？」

「ああ、したけど。なんかアリスを小さくした様な娘なただけど？
『ふふっ そうよ。私の小さい頃をイメージして創ったNPC。』

あなた好みだと思うのだけれど？」

NPCとはnon player characterの略でコンピュータが操作する仮想キャラである。

『ど、どういう意味、かな……………？』

『だってあなたロリコンでしょ……………ツプ……………ククク……………』

『なっ！ なんでそうなる！？』

『さあ……………とにかくミッションを済ませてね……………ククク……………』

この女、俺が『年増』って言ったことまだ根に持っていてやがったのか……………

と、そこで突然ティナの怒声が響いた。

「……………イイカゲンに返事ヲスルノデス！ コノ間拔ケ！」

俺は一瞬仰け反ってしまったが、とりあえず謝罪し、自己紹介を試してみた。

「あ、ご、ごめん。えっと俺はジン、よろしく？」

「分カレバ良イノデス！」

不承不承と言った感じだが、少し納得した表情を見せるティナ。

しかし、これがNPCなのかと、AI（人口知能）の進歩に驚愕する。

「デハ、コレヨリミッション00ヲ開始スルノデス！ デスガ、刃^{ジン}ハ初メテデス！ 詳シイ説明ガ要ルデアリマスカ？」

どこがおかしな日本語だし、やたらと語尾を強めて発言している。もともと日本製ではないのだから仕方がないのだろう……と納得する。

俺がそんな事を考えていると、さらにきつい口調で語りかけられた。

「早く返事ヲスルノデス！ イエスカノーデ答エルノデス！」

全体的にきつい口調が語尾はさらにきつくなっていった。

まあ可愛い声なのできつい口調で言われても腹は立たなかったのだが、俺は気が短い娘だなと思いつつ、とりあえず「イエス」と答えしてみた。

「イエスハ受け付けラレタノデス！ ソレデハ説明致シマスデス！ コレハミツシヨント言ツテモ実際ニハミツシヨン前ノテストノヨウナモノナノデス！ ドンナ方法ヲ使ツテモOKナノデコノ建物カラ脱出シテ下サイナノデス！ チナミニ制限時間ハ無イノデス！ 宜シイデスカ？」

俺は「イエス」と答えた。

「デハ、ミツシヨン00開始ナノデス！」

さて脱出と言われても、扉があるわけだから、そこから出ればいいんだろう。

俺は普通に扉まで歩き、扉の取っ手を掴み引いてみた。

が開かない。次は押してみる。しかしビクともしない。どうやら鍵が掛かっているようだ。

まあすんなり開いて出られたんじゃないやテストに成らないだろうかと納得する。

ふとテイナの視線を感じ、そちらに目を向けるとテイナはNPCの癖にやたら呆れた表情をしている。

まあNPCと言っても、本当の人間にしか見えないわけだし、美少女に呆れた表情をされるのはどうも良い気分ではない。俺はとり

あえず聞いてみた。

「ん、どうかしたか？」

するとティナは目を細め、侮蔑の言葉を吐き出した。

「オマエハ馬鹿ナノデスカ！？ ココハ魔法ノ訓練ヲスル所ナノデスヨ？ 魔法ヲ使ワナイトハドウイウ了見ナノデスカ！」

俺はその迫力に一步後退る。たしかに正論である。返す言葉も無い……

なるほどここは魔法が使い放題だった。（魔力が続く限りだが）
普段、抑えに抑えている魔力。過去一度も開放した事が無い。一度どれ程の威力があるのか試したかったのだ。

俺は頭上に手を掲げ、そこに魔力を集中させた。

頭上に薄赤い光の玉が浮かび上がる。

（ちなみに高レベルの魔法使いは手を揚げない、俺は手を揚げないと集中させずらいから揚げていただけだ）

俺が使おうとしている魔法は、無詠唱の物質魔法。一般に光弾と言われる初級魔法で、魔力を10センチ程度の丸い塊にして目標物にぶつける事を目的とする魔法である。

ただし初級と言ってもその威力は魔力（力量）に左右される。例えば魔力が10程度しか無い者が使うと薄板一枚割るのがやっとだろう。しかし俺の親父ならコンクリートさえぶち破る光弾を造ることが可能だ。アリスなら……厚さ数センチの鋼鉄板でもぶち抜くかも知れない。

これが上級魔法になるとさらに威力の違いが大きくなる。

俺の頭上の光弾が更に真紅に輝き出した。

「いつけー！」

俺は掛け声とともに光弾を扉に向けて発射した。

（もちろん掛け声など不要である……）

光弾は扉に向かって飛んでいく。一瞬の出来事だったが扉には丸い穴が開いた。

そして扉はゆっくり開かれた。

実につまらない結末である。

しかしティナは驚愕の表情を浮かべている。口をパクパクさせ何か言いたい様だが声にならないといった感じだろうか？

そしてアリスから脳裏に声が届く。

「ちよつと…… あなた、とんでもないわね。 その建物は絶

対に1発では開かない様にプログラムされているのよ。 被験者の力量を測るため数発打たせてから自然と開く仕組みなの。 まあ計測不能の力量が与えられたら開いてしまうというバグがあったわけね……」

「計測不能？ いったいいくらまで計測可能なんだ？」

「魔力9999までよ。 あなたはそれを超えたのでしょーうね。 姉さんからあなたの事は聞いていたけど、まさか此処までとは思わなかったわ……」

いつものアリスとは思えない淡々とした口調だった。

ISRO（国際魔法研究機関）の公式見解では人間が物理的に出せる魔力は1000が限界だとしている。しかし世界には1000を僅かに超える者が数人存在する。が、それも計測ミスあるいは誤差だとしている。

リング（魔法制御装置）は1999までを無効化するように造られている。防御機能も同じく1999までの攻撃を完全無効化するように造られている。

そしてVRMTSは9999まで計測出きる様に設計された。これはあくまで魔法技術の研究成果として、いかに進んでいるかを誇示するためだろう。

「なるほど、姉さんが、あれ程あなたを隠そうとした理由が分かったわ……」

「母さんが？」

「とりあえず、次のミッションはNOとして、そこから出てくれるかしら？」

「あ、ああ分かった……」

アリスは悩んだ。このままジンを表舞台に上げると、間違いなく軍事利用される。下手すれば捕らえられ拘束された上、研究対象として一生を終えることになる。

『ジンには平穩に暮らしてほしいの。お願いアリス、何かあったらあの子を守ってね……』

それがアリスが聞いたカーラの最後の言葉だった。

その数日後にカーラが亡くなったとジンの父親から知らせを受けたのだ。

だから姉さんは隠そうとした。でも、このまま本当に一生隠し通すなんて出来るの？

まさか一生、お邸の中に閉じ込めておくわけにもいかないのよ？
わたしはどうやってジンを守ればいいの、教えて姉さん……

8話

突然の光の奔流が俺を静寂の常闇から引き摺りだした。

ちよつと大げさに言ってみたが、何のことは無い、眩い光で目を覚ましたただけだ。

そう、翌朝、突然部屋の電気を煌々と点けられて、カーテンを全開にされたのだ。

意識がはつきりしておらず、突然の出来事を理解出来ない俺は、眩しさに霞む目を擦りながらも辺りを見渡した。

両手を腰に当て、すこし仰け反る感じで俺を見下ろす女性がいる。肩に掛かる神々しいばかりの金髪を払いながら、その女性は口を開いた。

「さつさと起きてもらえるかしら？ 学校に遅刻するわよ」
ようやくそこで俺はアリスの存在を思い出す。

眠い目を擦りながら俺は抗議の文句を口にした。

「なんだよ。俺は学校行かないし。ってか勝手に部屋入るなよ」

「学校行かないってどういう事なのかしら？ あなたはまだ中学生なのよ」

「 行きたくないだけだ」

そう言っただけ俺は頭から布団を被る。

しかしアリスは甘くなかった。俺は即座に布団を剥ぎ取られてしまった。

「ちゃんとした理由も無しに、行かないとか、認められないわよ」

「認められないってなんだよ。そんなのアリスに関係ないだろ……」

俺は眉間に皺を寄せ、少し睨むようにアリスを見つめた。

アリスも俺を見下ろしながら睨み返す。

2人の視線がぶつかり眼力勝負の様相を呈した。

俺は目を細め射抜くような視線で、さらに力強く睨む。

しかしアリスは怯むどころか、その碧の瞳から光彩が消していた。

ブルツ！ 俺の背筋に悪寒が走った。どうやら鳥肌も立っている。
「もう一度言わなければ分からないのかしら……？」
「……」

そして俺は今学校への道のりを歩いている。

「ふうー」しかし美人は怒った顔がやたら怖い」

そんな事を呟きながら、いつも2人だった通学路を今日は1人で歩いていた。

学校の正門を潜り校内に入る。いつもと変わらぬ風景がそこに広がっている。しかし遅刻ギリギリの時間の為、生徒の数は少ない。

校舎の1階で上履きに履き替えて3階の3年の教室に向かう。ドアの前で立ち止まり帰りたい衝動に襲われた。

ドアの内側からは生徒達の喧騒が聞こえる。俺は思い切ってドアを開けた。一瞬の静寂。皆がこちらに視線を向けた。どうやら先生が来たの勘違いしたのかもしれない。俺の存在に気付くと「おはよー」「オッス！」などと声をかけてくる者がほとんどで、すぐに教室内は喧騒に包まれた。

俺は教室内を見回し風夏の姿を探す。風夏は直ぐに見つかった。自分の席に座り俺を見つめ固まっている。その表情は……

俺は風夏の視線から逃れるように視線を逸らした。
そのまま自分の席に座り、授業開始のベルを待つ。

授業も全て終わり、俺は職員室に顔をだした。

放課後、職員室に来るようにと、朝一番で担任に言われていたのだ。

俺の不合格はもちろん電話で知らせてあるので知っている。俺は無断欠席をしたことで咎められると思っていた。

しかし、昨日の俺の欠席は風夏が適当に誤魔化してくれたようで、無断欠席にはならず、責められることは1つも無かった。

担任は不合格だった俺の心配など皆無なようで、風夏の事を心配

して俺を職員室に呼んだのだと言う。

「昨日から水月の様子がおかしくてな。おまえなら何か知ってるんじゃないか？」

風夏は普段から明るく、成績も優秀、スポーツ万能、容姿端麗とも相まって学校でも人気者だった。その風夏が昨日からほとんど誰とも口を聞かず、一日中暗い顔をしていると言う。

その原因が俺だろうという事は分かっているが口に出すわけにはいかない。

「さあ、俺はなにもしらない……」

俺は嘘が下手なようだ。担任は直ぐにピンと来たようで、更に追求してくる。

「やはり何か知ってるようだな。とゆうか、おまえが原因か？」

「……」

「ふむ、まあおまえの様子も今日一日変だったしなあ……言いたくないなら仕方がないが、なにか心配事があるなら遠慮なく俺に相談しろ。それと、おまえは2次試験が控えてるんだから、しっかり勉強しとけ。いいな？」

俺は黙って頷いた。

「じゃ、帰っていいぞ」

俺は黙って軽く一礼し職員室をあとにした。

入学試験に不合格。そして翌日の無断欠席。皆の反応に少し恐怖していたが、取り越し苦労とはこの事で、皆は普段どおり何の杞憂も必要無かったようだ。

まあ俺と風夏の間にある見えない壁の所為で、俺達に話し掛ける者は少なかったが、それでも普段と変わらない一日だった。ように思える。

ただ1人を除いて。

その1人も俺には一切近づいて来なかった。

俺の秘密も誰にも言っていないので少し安心する。

しかし、これが3月まで続くとなると、ちょっときついかもしいない……

俺がマンションに帰りつくと、アリスが待っていたかのように俺をソファアに座らせた。

アリスは俺の真正面に座り、真剣な面持ちで俺に話し掛ける。

「真面目な話しをするから、あなたも真剣に考えて答えてね」

俺は戸惑うも、背筋を伸ばし、コクリと頷いていた。

アリスの真剣さに抵抗する余地を見出せなかったのだ。

「あなたの魔力は強すぎる。それがどういいう事が分かるかしら？」

突然そんな事を言い出すアリス。

俺は真剣に考えたが別に何も思いつかなかった。

「リングの制御を破ってしまうことが困るっちゃ困るけど、それもたまにだし、そもそも魔法は規制されてるから滅多に使う事もないしなあ……」

「そうね。確かに一般人が魔法を使う機会は少ないわ。だから姉……あなたのお母様ね。姉は、あなたに平穩を望んだ。魔法を使わなければ魔力が減ることも無い、人から魔力を貰う必要がないものね？」

「そういえば母さんは俺に普通の人間として生きて欲しいとか言うてたな。」

「でも、リングの制御を超えてしまうことが、そもそも大変なことなの。わたしの知る限り、そんな人間はあたな以外にいないわ。」

もしそれが人に知れたらどうなるかしら？」

「どつって……べつに吸魔力種だつてばれるよりマシなんじゃないか？」

「その考えが間違ってるわね。たしかに一部のオカルト宗教的な団体が、吸魔力種を殺すという事件がある所為でマスコミが騒ぎ立て

てるわ。その所為で一般人の間でも吸魔力種を怖がる傾向にあるのだけれど、それも日本と一部の国に限ったこと。そもそも日本人はマスコミに踊らされすぎるのよね……事実、わたしは母国では吸魔力種として堂々と仕事もしてるしね」

「そうなんだ……」

「そう、だから吸魔力種であることはそれ程悲観することじゃないわ。それよりもあなたの魔力の方が心配。もし政府筋や軍関係の人に知れたら、あなたは拘束され研究材料にされるわよ?」「っな!まさか……」

まさかと思いつつも、昨日のVRMTSの結果を思い出した。リングの制御を破ってしまう事で、普通以上の魔力を有している事は知っていたが、まさか計測不能とか思いもしなかった。たしかに稀有すぎる。

「それで、あなたに選択してほしいのよ」

「選択?」

「そう。姉さんが言った様に、魔力を使わず隠れて暮らすか。何も隠さず堂々と暮らすか」

「堂々として、それって捕まるって事じゃないのか?」

「たしかに、今なら簡単に捕まるでしょうね。でも 捕まら

ないだけの力を手に入れれば良いんじゃないかしら?」

「そんなことが出来るのか?」

「難しいわ。でもあなたがすると言うなら、わたしは全力でサポートするわ。わたしも一緒に戦ってあげる。あなたは1人じゃないのよ?」

1人じゃない。その言葉は俺には重かった。

「1人じゃないか……」

「そうよ?」

俺は俯き口を閉ざした。

大好きだった母は死に、吸魔力種だという驚愕の事実を突きつけられた。

父親はその所為かいつも俺に冷たかった。

つい先日、俺は最も信頼していた少女に見捨てられた。

俺は呟く様に、思わず口にしてしまった。

「俺は1人だよ……………」

「……………」

アリスは立ち上がった。俺の情けない言葉に呆れたんだろう。

自分でも思う。こんなこと口にする気は無かった。情けない男だと。

俺は俯いたまま目を閉じ唇を噛み締めていた。こんな情けない自分分は嫌だった。

バフツつとソファアが沈み、誰かが横に座った事が目を閉じていても分かった。

もちろん此処には俺とアリスしかいない。

俺はゆっくりと目を開け視線を横に向けるが、アリスの顔を見る事が出来ず、その視線はアリスの胸に向かっていた。

だが、いつもの様なドキドキ感や変な気分襲われる事はなかった。ただその柔らかな膨らみをぼんやり眺めていた。

アリスもそんな俺に、何処見てるのかしら？ などとからかう素振を見せない。

そしてゆっくり俺の顔を、その胸に抱きしめてくれた。

暖かくて、柔らかくて、気持ちが和らいでいく。記憶に無いはずなのに、なぜか小さい頃、母親に抱かれていた事を思い出した。

「あなたは1人じゃない」

優しくそう囁くアリス。

俺は知らずにアリスの背に腕を回し、しがみ付く様にアリスを抱きついていた。

アリスは俺に教えてくれた。

母親に俺を守って欲しいと頼まれた事。母親は俺に平穩に暮らす事を望んでいた事。

しかし、アリスは昨晚悩み、俺と戦う事を決意したと言った。それが俺の為になるはずだと。だから一緒に戦おうと。

そして今、俺はVRMTSの中にいた。

ミッション00は昨日終わっているの、今はミッション01だ。「ソレデハ、ミッション01ヲ開始スルノデス！ 用意ハ良イデスカ？」

「イエスだ」

そこは森の中だった。

ゲーム感覚で訓練出来る様にと敵はモンスターの様相を呈している。

まず最初に出てきた敵はファンタジー世界のゴブリンと言う妖魔だった。

「敵ヲ殲滅スルノデス！」

「イエッス！」

俺は答えて飛び出した。眼前に現れたゴブリンは4匹。

右手を頭上に掲げ、光弾を4個生み出した。それをゴブリンめがけて飛ばしていく。

「いけえ！」

光弾は閃光を残しゴブリンに次々と襲い掛かる。あっと言う間の出来事でゴブリン4匹の殲滅は終わった。

俺はほっと一息吐き出した。

が、突然ティナの怒声が俺に飛んできた。

「オマエハ馬鹿ナノデスカ！ タカガ『ゴブリン』ニソクナ魔力ハ必要ナイノデス！ モット相手ノ強サヲ見極メ、魔力ノ使イ方ヲ学ブ必要アリナノデス！」

そしてミッション01を不合格とされた……

俺はティナから魔力を貰い再度、ミッション01に挑戦する。

普通のVRMTSには魔力を貰うという機能は無い。これは吸魔

力種であるアリス用にオプション機能を追加したVRMTSなのだ
そうだ。

俺はその後何度もテイナの怒声を浴びながら、ミッション01に
挑戦したが、なかなか合格を貰えなかった。

アリスが言うには強大な魔力ほど制御に難しいらしい。

まずは自分の思った通りの強さで魔力を制御出来なければ話にな
らないと言われた。

俺はアリスの「デイナーにするから、それで一端終わってね」の
一言までミッション01を繰り返していた。

そして最後も不合格。

VRMTSから離脱間際に「コンナニ出来ノ悪イ生徒ハ初メテナ
ノデス！」と言われ現実世界へと戻ってきたのだった。

8話（後書き）

うじうじジンは。

見苦しかったかと思いますが、次回はミッション頑張ります。

9話

アリスの「ディナー」と言う言葉でリビングに戻った俺は、テーブルに並べられた料理に目を奪われた。視線をアリスに向けると、ニッコリ微笑み「美味しそうですね」と言っている。

俺は頬を引き攣らせながらも、恐る恐る聞いてみた。

「えっと、これは？」

「今夜のディナーよ？」

アリスは不思議そうに首をキョトンと傾げた。

テーブルに並んでいるのはピザ、チキン、コーンサラダ。それとコーラか？

「これって、ピザーの宅配だよな？」

「ええそうよ。わたし好きなの」

アリスは満面の笑みを浮かべ、ジュリ！と舌なめずりをしている。

「俺は手料理を期待してたんだけど……？」

「あら、そうなの？ それなら早く言ってくれないと……」

俺はガクツとテーブルに両手を付いて頂垂れた。

アリスはそんな俺など素知らぬ顔で「さ、頂きましょ」とさっさとテーブルに付いている。

「食事はわたしが作るとか言ってたか？ 俺の記憶違いなのか？」

まあピザは俺も嫌いじゃ無いんだが

美味しそうにピザを口に頬張るアリスだが、ふいにさっきの訓練の話題を始めた。

「ミッシヨン01、だいぶん苦労しているようね？」

「ん、ああ。オプリン無しで撃った事なんて無いしな。力加減が思うようにいかない」

「オプリン？」

「うん、オプション付きリングだよ。調節機能が付いたリング」

調節機能。

通常の魔力制御装置は魔力を完全無効化するように設計されているが、それでは魔法の訓練が行えない為、訓練用に開発されたオプション機能である。例えば調節の値を10にセットすれば魔力力量が1000の者でも10以下の力しか出せない様になる、といった仕様である。

「それでオプリンね　日本人ってなんでも略するのが好きな民族よね……」

アリスは得心しているのか呆れているのか微妙な面持ちだった。

「日本の魔法教育ってどんな感じなのかしら。実際に魔法を使ったりするの？」

「さあ、学校毎に違うだろうけど、小中学校じゃどこも基礎を教えるだけじゃないかな。実際に魔法を使うのは高校からだと思う。アリスの国は違うのか？」

「そうね。まあわたしの国でも似たようなものよ」

そんなくだらない会話をしながらのディナーだった。

ディナーの内容に不満だったが、食べ始めると中々に美味しく、食べ過ぎたようだ。

俺は苦しい腹を擦りながら立ち上がる。

「じゃ、ごちそう様」

「お粗末様でした。じゃミッションの続き頑張ってね」

「へ？」

「「へ？」じゃないの。ミッション01、今日はそれが終わるまで寝れないわよ」

満面の笑みで俺を見つめるアリス。

だが瞳は笑っていない。反論を一切許さない笑顔である。
俺は渋々腹を擦りながらVRMTSに寝転んだ。
このまま眠りてえ……

そして俺の訓練は再開された。もちろんミッション01である。

ちょっと強めに撃てばティナの暴言が飛んでくる。

「コノ間拔ケ！」

逆に弱すぎるとゴブリンは死なない。そしてゴブリンが反撃してくる。俺は逃げ惑う。

「逃ルナ、コノ才莫迦！」

俺は頂垂れ、半分涙目でティナの手を握り魔力を貰う。

「ナンデワタクシガ、オマエミタイナ男ニ身体ヲ預ケナイトイケナイノデスカ！」

「お、おい手握ってるだけだろっ！ 人聞きの悪いセリフ言ってるじゃねえよ」

「ホントニ、ブツブツブツブツ……」

何がブツブツブツだよ。わざわざ擬音を口にするな……

俺はアリスに念話で抗議することにした。

「おーいアリスー」

「なにかしら？」

「このティナの性格どうにかならないのかよ？」

「あなたの趣味に合わせたつもりだけれど？」

「こんなの趣味じゃねえって、もっと普通にしてくれよ」

俺は涙目で訴えていた。

「今更そんなこと言われてもねえ……それより01は終わったのかしらっ？」

「いや、ただだけど……」

「文句を言う暇があるなら、訓練頑張ってるね あ、仕方が無いか」

らヒントをあげるわ。ゴブリンのHPは100程度だから、魔力を15程度にイメージしてみたらどうかしら？」

「魔力を数値でイメージしろってことか？」

「そうよ、闇雲に強弱をつけるより、具体的にイメージして、それを身体で覚えるのよ」

「なるほど……OKやってみる。ありがとう」

「うふつ。素直な子は好きよ」

「……」

「じゃ、わたしは少し出かけるけど、他に何かないかしら？」

「別がないけど、こんな時間に何処に行くんだ？」

「……子供は余計な詮索しないの　じゃ、何もなければ行くわよ？」

「あ、ああ、了解」

「行ってきまゝす」

その後すぐに玄関の扉が閉じられた音がしたが、もちろん俺の耳には届いていない。

あの妙な間はなんだったんだ……

気になるが、俺には関係ないとミッションを再開する事にした。

しかし、魔力15つてのが、どの位なのか分からない。

「おいティナ、俺が撃った光弾の魔力つてどのくらい分かるか？」

「当然ナノデス！ オマエハソナナコトモ分ラナイノデスカ？」

くそお、たかがNPCの癖にドヤ顔つてなんなんだよ……

「ああ、分からないから聞いてるんだよ」

「仕方が無いデスネ……次カラ、ワザワザ、イチイチ、親切ニ、教エテヤルノデス！」

NPCにここまで馬鹿にされる俺って……しまいには泣くぞ！

しかし、この方法は効果的だった。

俺は今まで、見当違いの力配分をしていたようだ。力の幅が5以

下から100以上と、てんでバラバラだったのだ。

ゴブリンのHPも分からなかったから、適当に撃つしか無かったのだが、ティナが数値化してくれることで、微調整がすんなり上手くいった。

あとは今の力加減が15なんだと身体に覚えさせる事が必要だ。

そして数回不合格を貰ったあと、なんとか01をクリアする事が出来た。

「トリアエズ合格ニシテヤルノデス！ シカシ次ノミッションカラハ教エナイノデス！」

何処までも尊大な態度だが、俺は嬉しくてティナの頭をガシガシ撫でていた。

「ああ、分かった分かった。ありがとな」

「コ、コラ、ヤ、ヤメルノデス！ ナ、生意気ナノデス！」

口では文句を言いながら、逃げもせず薄っすら頬を染めるNPCティナ。

ほんとにNPCなのかと疑いたくなった。

だけど、なんとなく可愛く思えてきた。

俺は今覚えた感覚を忘れなくなかったので、そのまま訓練を続ける事にした。

アリスの事も気になるが、子供じゃないんだし心配はいらないだろうと頭から振り払う。

「ティナ、ミッション02いくぞ」

「フン！ 何処マデモ生意気ナ奴ナノデス！ ガ、了解ナノデス！」
どこか嬉しそうなティナ。

そしてミッション02が開始された。

10話

ミッション02では敵の数が増え、更にHPの高いモンスターが追加された。

つまり同時に2つの力配分で光弾を作り出すことを要求されたのだ。

俺は難なくと言うわけではないが01ほど苦勞することなくクリアする事ができた。もちろんティナの罵詈雑言を浴びたのは当然のことだが……

とりあえず02をクリア出来た事と、時刻が0時を回っている事で、今日は此処までにするとティナに言い、VRMSTから離脱した。どこか寂しそうにするティナに、俺は後ろ髪を引かれる思いだったが、これ以上は俺の体が持たない。

てゆうか、俺を罵倒するのがそんなに楽しいかっ！ NPCに感情を持たすな！ とティナとアリスに文句を言いたかった。

VRMSTからリビングに戻った俺はアリスの所在を確認したが、やはりアリスはまだ帰っていないようだ。

時刻はすでに0時を回っていて俺は少しの不安を覚えるものの、疲れと眠気に勝てなかったようだ。知らず知らずに寝てしまっていた。

俺が目を覚ましたのは翌朝のことだった。

ソファで寝ていた俺の身体には毛布が掛けられている。俺は空調も効いているし、何も掛けずに寝てしまったはずだ。

意識が少しはつきりしてくるとキッチンから音が聞こえる。アリスが帰っているのかと俺は身体をソファから起こした。

「あら、おはよう。どうしてそんなところで寝てたのかしら？」

俺の心配を他所に、いつもの明るい声が俺の耳に届いた。俺がキッチンに視線を向けると、アリスは俺に背を向け何か作っているようだった。

「いや……」アリスが帰ってなかったから、と言いかけたが、やめることにした。

「えと、02まで終わって、休憩してたらそのまま寝てたって感じかな……」

頭を掻きながら、俺は上手く誤魔化せたかと不安になる。

「そうなの、おめでと　でもそんなところで寝たら風邪引くから、ちゃんとベッドで寝るようにしてね？」

「う、うん……」

俺は昨晚何処に行っていたのか、いつ帰ってきたのか、それを聞きたかったのだが、なぜか聞くことが出来なかった。そして俺はアリスの作った朝食を食べると「学校に行きなさい」と追い出された次第だ。

そんな毎日が数日同じように繰り返された。

俺は朝学校に行き、帰宅するとすぐにVRMTSに放り込まれる。そして夕食後にまた訓練をする。そんな単調な毎日だ。

その間アリスは出かける事も無く俺の訓練が終わるのを待っていてくれた。

そして訓練を開始して7日目だろうか。アリスは俺の訓練中に出かけたようだった。

『ようだった』というのは、俺が念話を送っても返事がなかったからだ。つまり俺に黙って出かけたって事になる。

さらに不安が俺の胸に込み上げる。しかし明日は高校の2次試験だ。さすがに寝ないとまずいだろうと思うもののベッドに入れない。そしてまたソファァーでいつの間にか眠ってしまった。

翌朝、またいつもと同じようにアリスに起こされた。

いつもと変わらない笑顔だ。

「またソファで寝たの？ ダメじゃない！」と俺の頭に軽くコツン！ と拳こぶしを落とすアリス。だがその表情は優しさに満ち溢れている。

もちろん痛みなんてこれっぽっちも無い。しかし、その優しさの裏で何をしているのか、俺は不安でしようがなかった。心配と不安でいっぱいだった。

聞きたくても聞けない、そんな心情が顔に出てしまい、俺は下を向いた。

アリスはそんな俺の横に座ると、そつと俺の手を握りしめ、優しい声で囁く。

「今日は試験でしょ？ ちゃんと魔力を吸収してね」

俺は黙って小さく頷くだけだった。

「……」

しばらく無言の時間が過ぎていく。

先に口を開いたのはアリスだった。

「どうしてソファで寝ていたのかしら？」

「……」

俺は答える事が出来なかった。同じ言い訳は2度は通用しないだろう。だからと言って正直にアリスが心配だったとは言えない。考えただけで顔が熱くなる。

「わたしが居なかったから？」

俺は仕方なく俯いたまま、小さく頷いた。そして後悔した。

「ふふつ、甘えん坊なのね。1人で寝るのが怖いのかしら？」

俺の不安が怒りに変わったのは言うまでもないだろう。

「嘘よ。冗談。ごめんなさいね。心配してくれてるのよね

？ でもあなたが心配する事なんて何もないから安心して」

その言葉で怒りは治まっても、心配せずにはいられない。もちろん不安は消えるはずもなかった。

しかし話しはそこで打ち切られてしまった。

「さ、そろそろ朝食にしましょ。急がないと試験に遅れるわよ」
アリスはそう言ってキッチンに向かう。

いつもの様にコーヒーにサラダ、トーストに目玉焼き、ミルクにオレンジジュースが、テーブルに並べられる。アリスは鼻歌など歌ってご機嫌のようだが、俺は不安は何一つ解消されてはいなかった。

そして俺は試験会場に向かった。

ここ数日勉強はしなかったが、もともと筆記試験で落ちるとは思っていない。やはり問題は魔力蓄積である。そしてもうひとつ、魔力力量も問題だとアリスに言われた。魔力が強すぎる所為で魔力を抑える必要があるのだが、その力加減が出来ていなかったからだと言われたのだ。

実際魔力蓄積は合格ラインには届かないだろう。しかし数日の訓練が功を奏し魔力力量を500近くでとめることが出来たはずだ。もちろん数値が見える訳ではないが、数日の訓練で身体が覚えていく。今思い返せば前回の1次試験では力量も50出ているかどうかだったと思う。

だが今回は間違いなく490から500位で測定されたという自信がある。

これなら蓄積の不足分を力量で補えるはずだ。 - たぶん合格できる。

そして俺は意気揚々と家路に付いた。

アリスはいつもの様に笑顔で俺を迎えてくれる。いつの間にかアリスの存在が俺にとって不可欠なものになっていた。

べつに変な意味ではない。たしかに時折見せるアリスの色気が俺を変な気分にする事も有るには有るのだが、そういう意味ではなく、本当の姉のように思えるのだ。

今でも学校で風夏の顔を見るのは辛い。目が合うといつも俺から逸らしてしまう。その度に俺は落ち込んでしまうのだ。情けないが

どうしようもない。

だがマンシヨンに帰ればアリスがその笑顔で俺の沈んだ気持ちを明るくしてくれる。そしてアリスが俺に魔力を与えてくれる。その時間は俺の至福の時だった。

11話

「風夏あ、ちよつと良い?」

ここは風夏とジンが通う中学校の教室である。

風夏が窓際に立ち1人ぼんやり外を眺めている時、後ろから声を掛けられたのだ。

振り向いた風夏の前に居たのはクラスメイトの女子数人。

風夏は無理に笑顔を作り彼女達に答えた。

「なあに?」

しかし彼女たちには笑顔は無い。真摯な面持ちで1人の少女が切り出した。

「こんなところに居て良いの?」

突然の言い様に風夏は小首を傾げる?

「えっ、どういう事?」

「今日発表でしょ? …………… 鳴神君」

風夏は表情を一瞬曇らせるが、すぐに笑顔に戻り平静を装った。

「…………… ああ、ジンなら大丈夫じゃないかな……………」

「どうして? 一度落ちてるんだよ。…………… それも推薦で……………」

……………」

風夏は下唇を噛み締めた。本当は心配でどうしようもないのだ。

「なにがあつたのか知らないけどさ、いい加減仲直りしなよ。風夏は知らないかもだけど、鳴神君人気あるんだよ? 風夏がそんなんだと鳴神君取られちゃうよ」

「え、でもわたし、ジンとはなんでもないし……………」

「なに言ってるの。あんた達は全校生徒が認める公認のカップルなのよ。あんた達は否定するけど、どこからどう見てもカップルにしか見えないんだし。………… 私達だって鳴神君の事好きなんだから、で

もやっぱり鳴神君には風夏が一番相応しいと思うから誰も手を出さないんだよ」

「そうよ、私達は風夏の親友だから風夏から鳴神君を取ろうなんて思わない、でも他のクラスや他の学年の女子は狙ってるんだよ？」

「……………でも、わたしは……………」

「もうっ！ どうしちやったの？ いつも明るくて全校生徒の憧れのアなたが、なんでそんな暗いのよ！ 鳴神君だつてずっとおかししい………… 私達親友じゃないの？ なんで相談してくれないの？」

「それは……………」

風夏も出来る事なら相談したかった。だが風夏は口が裂けてもジーンが吸魔力種だとは言えなかった。しかしそれが更に風夏を苦しめていた。言えないという事事態が吸魔力種に対して差別してる事になるんじゃないか？ そしてこんな気持ちでいる以上ジーンに話し掛けることも出来なかったのだ。

「ごめん。どうしても言えないの……………」

「うん、こつちこそごめんね。無理に聞き出すつもりはないから……………でもさ、鳴神君も鳴神君よね。いつも風夏を睨んでさ、風夏が見たらすぐ目を逸らしてるでしょ？ なんかあたし、最近の鳴神君見てたら幻滅だわ……………」

「うん、わたしも同じ。たかが一次に落ちたくらいで、あんなに落ち込んでさ。それに風夏が受かったからって八つ当たりしてるんじゃないよ？」

「ちがうっ！ そんなんじゃないの…………… わたしが、ジーンを、傷つけたから……………」

それだけ言うと風夏はまた俯いてしまった。しかし彼女達はそんな風夏をみて得心したように頷きあう。

「まだ、そんなに鳴神君を庇う気持ちがあるなら行ってきなよ」

「うんうん、まだ好きなんですよ？ もしまだ落ちちゃったら誰が鳴神君を支えてあげるの？ あんたしか居ないじゃん」

「そうだよ、仲直りしたいなら今しかないとと思う。今からならま

だ間に合うよ」

ゆっくり首をあげ、彼女達に視線を向ける風夏。そんな風夏に皆が優しく微笑み掛ける。そして力強く頷き、「ほら、早く行け〜」と風夏を無理やり廊下に放り出すのだった。

廊下に放り出されて戸惑う風夏だが、すでに教室の扉は閉められている。

(行くしかないよね……)

風夏は一人頷き走り出した。すれ違う担任の言葉も無視してひたすら校外を目指した。

ジンがマンションを出たのは9時少し過ぎ。入試の合格発表は10時からである。

アリスはどうせ落ちる事はないんだし、行かなくてもいいんじゃないの？ と言ったのだが、一応中学の担任にも結果報告を入れなといけないからと、ジンは合格発表を見に来たのだ。

しかし本当の理由は少し違っていた。やはりまだ子供なのだ。自分の目で確認しないと不安なのだろう。

そして発表会場　　と言っても高校だが、その正門の前に風夏が立っていた。

ジンが風夏に気が付いたのは正門から数メートル手前である。風夏はもう少し前から気付いていたようで、じっとジンが来るのを待っていたのだ。

お互いの視線がぶつかりとジンは足を止めてしまった。

(なんで風夏がここに?)

ジンは視線を落とす。まさか自分を心配して風夏が来たとは、微塵にも思わなかったのだ。

(偶然だ。たまたま今日入学手続きに来たんだ)

ジンは無理やりにそう思い込んだ。そして俯き風夏に視線を向けないように、気が付かない振りをして正門を潜ろうとした。

俯きながら歩いて、その近くを通る時には、風夏の白い脚が視界に映る。そしてその脚が自分の方に近づいて来た。

ジンは後ろを向き逃げ出したかった。しかしそこまで見つとも無い真似は出来なかったのか、俯いたまま目を瞑り歩き去ろうとする。そんなジンの腕をしっかりと風夏が？まえた。

ジンは驚き顔をあげた、そして風夏の顔に視線を向ける。

「は、発表でしょ。……一緒に行っても良い……かな？」

風夏の口元には薄っすら笑みが浮かんでいる。しかしその瞳には涙が浮かび今にも泣き出しそうだった。

風夏は必死で笑顔を作ろうろしているのだが、もし嫌だと言われたらどうしよう。と内心は逃げ出したかったのだ。

しかしジンはそうは思わなかった。

「なんでそんなに無理するんだ？ 手、震えてるぞ。……今にも泣きそうな顔して、そんなに俺が怖いならなんで俺にくつつくんだ？」

「ちがうっ！ 怖いけど、怖いのはジんに嫌われること……この前はごめんなさい。わたしなんて答えたら良いかわからなくて、それで……でも、ジンが怖いとか思ったことない。今日までも、これからも怖いとか思うはず無い。だから嫌わないでっ！」

風夏はジんに抱きついていて。抱きついて激しく泣き出した。

「お、おい……」

「わ、わかったから、泣くな」

ジンは慌てて風夏を引き剥がすと、その腕を取り走り出した。

入学発表当日、それも正門の前である。

これは後日談だが、

「ほらあの入正門で女の子泣かしてたの……」

「あいつだぜ、女泣かせのジンって奴……」

そんな噂が学校内で広がったのは言うまでも無いことだった。

そして合格発表。

それを目にしたジンは、胸を撫で下ろし、ほっと安堵の溜め息を

吐いた。その横では風夏が大喜びで飛び跳ねている。事実、風夏は自分の合格より数倍嬉しかったのだ。

「おい、やめろって、そんなに飛び跳ねたらパンツ見えるぞ」

「だって……嬉しいんだもん」

そう言って今度はジンに抱きつき泣き始めた。

男女で抱き合って泣く姿は他には見られないものの、女子同士ではそういう光景もちらほら窺えた。ジンは少し恥ずかしく思うものの、仕方ないなと風夏の頭を撫でていた。

「ねえ、これからどうする？ 学校行く？」

「ん、いや報告だけすれば良いだろ？ ってかお前は戻らないとま
ずいか？」

「ん〜、別にいいよ。久しぶりだし2人で居たいかな……」

そう言って頬を赤く染める風夏の腕はしっかりジンの腕に絡みつ
いていた。

「そ、そうだな……」

ジンの顔も赤く染まる。

「ねえ、ジンのマンション行っても良い？」

「えっ！ いや、それは……」

たじろぐジンに対して風夏は小首を傾げている。

「どうしたの？」

ジンの脳裏にアリスの顔が浮かんだのだ。

（別にやましい事をしてるわけじゃないし、良いよな……それにず
っと隠しとく事も出来ないだろうし……今日の風夏は機嫌が良いみ
たいだし……）

などなど、必死で自分に言い聞かすジンだった。

「そうだな、い、良いよ。い、行こう……」

「なにどもってんの？」

「そ、そんなこと無いって…… は、ははっ……」

（だ、だめだ……）ジンは涙目になっていた。

12話

俺は風夏を連れてマンションに帰った。

ドアの鍵を開け、扉を開ける。

「ただいま」室内に声を飛ばし、風夏を先に玄関に入れた。

「おかえりさない」と言うアリスと風夏が見つめあい、そして固まる。

その間、数秒。

見詰め合う2人、先に声を出したのはアリスだった。

「間違っていたらごめんなさいね。あなたは風夏ちゃんかしら？」

「は、はい。えっと……」

「ふっ、自己紹介は後でね、とりあえず上がってくれるかしら？」

「は、はい」

廊下を歩きながら、風夏が俺に小声で聞いてくる。

「ちよっと、どういうこと？ あの人は誰？ おかえりなさいって言ったわよね？」

「いや、いっぺんに質問するなって、とりあえず入れ、な？」

俺はそう言っただけで風夏の背中を押す。

リビングに入るとアリスが風夏をソファに座らせ、俺は風夏の横に座った。

アリスは「お茶を入れるわね」とキッチンに立つ。

風夏の視線が俺に突き刺さるが、俺は気付かぬ振りでも横を向く。

いや、まじで情けないと言うか何と言うか……

「ねえジン、合格発表はどうだったのかしら？」

「え、ああ、受かった」

「そう、おめでとう。2人、でお祝いをしなくちゃね」

「あ、ああ……」

2人の部分をやけに強調していた様に聞こえたが、気のせいだと自分に言い聞かす。

そんな俺とアリスのやり取りを聞き、風夏がわなわな身体を震わせている。

アリスはお茶を入れると、テーブルを挟んで俺達の前に座る。そして俺と風夏を交互に見て噴出した。

「そんな怖い顔しないで、風夏ちゃん。もちろん2人でお祝いつて言うのは、あなたとジン2人って意味よ。もしよければ、

わたしも混ぜてほしいのだけれど……」

「えっ、はぁ……」

俯き加減で上目遣いにアリスを見つめる風夏。どこか拗ねた表情だ。

「とりあえず自己紹介をするわね？ はじめまして、わたしはマルティナ・アリス・ウィンター。アリスって呼んで」

「あ、はじめまして、み、水月風夏です。よろしくお願いします」

「姉が言ってた通りのお嬢さんね。ふふっ」

「姉？ えっ もしかして、ジンの、お母様の？」

「ええ、いつも姉からあなたの事は聞いてたわ」

風夏の顔から怒りが消え、笑みに変わる。

アリスと風夏はすぐに意気投合したようで、俺の存在を忘れて楽しそうに会話をしている。

二人で嬉々として俺の恥ずかしい過去に付いて語っているのだ。

まあ仲良くしてくれるのは良い事だと我慢して聞いていた。

いつの間にか風夏の膝の上には、拾ってきた黒猫が丸くなっている。

「それからね、つい先日なんか」

そこまで言ってアリスは俺に視線を向けた。そしてニヤッと笑う。
「わたしの胸にね、顔を」わあああああつ。おい、なにを言う気
だあ！」「

俺は思わずアリスの言葉をかき消し、その口を塞いだ。

風夏は「えつ、なにに？」と興味深々なのだ。これは不味すぎる、これだけは意地でも聞かせる訳にはいかない。

「アリスさんの胸がどうしたの？」

まさかジン……セクハ

ラ行為でもしたの？」

やべえ、風夏の目から光彩が消えかけている。

「違うっ！ 変な誤解するんじゃない」

「じゃ、なんなのよ……」

俺はアリスに念話を送った。

『おい、頼むから誤魔化してくれ。あの事だけは勘弁して』

もう半泣き状態だった。

『まあ仕方ないわね。その代わりに、わたしの言う事は何でも聞く事。いいかしら？』

『わかった、なんでも聞くから頼む』

『つぶつぶ』

その間中、俺は風夏に襟首を掴まれ前後に大きく揺らされ詰問されていた。

「あつ、そうそう、風夏ちゃんに大事な話があるの」

アリスの真剣な面持ちに変わっていた。

俺の首を絞める風夏も、そのアリスの表情を見ると俺の首から手を離し、姿勢を正した。

「はい、なんででしょうか？」

そして来日の目的、どうしてここにジンと住んでいるか、俺の危険性、今は毎日訓練している事など、いともあっさり話してしまった。

終始黙って聞いていた風夏だが、アリスが言い終わるのを待っていたかのような勢いで、こう言った。

「わたしも、そのお手伝いをさせて貰えませんか？」

「……」

「……」

アリスは難しい表情をしたが、風夏はさらに食い下がる。

「学校での護衛ですけど、やっぱり男子だと限界があると思うんです。その、トイレとか、更衣室とか、体育の授業も男女別が多いですし、それに一人より二人の方がより安全だと思います」
いつになく必死で迫る風夏に俺は驚いていた。

真剣な面持ちだったアリスの頬が緩む。

「あなたならそう言うってくれると思っていただけね」

だから話

結局アリスは、この結果を読んで話たと言う事か。

俺はさすがに『年の功』と納得した。

その直後に、『年の功？ あとでお仕置きよ』と念話が飛んできた。

しかし、そんなアリスでも次の風夏の発言までは読めなかったよ
うだ。

「じゃ、わたしもここに住みますね」

「えっ？」

「なっ！」

「だって、護衛するなら一緒に住む方が良いんでしょ？」

風夏と同居、これ程嬉しい事はない。

アリスとの同居も然りだ。

しかし、同時に2人と同居って、こんな苦しい事は無い。

「でも、このマンションで4人は暮らせないわよ？ 部屋が足りないもの」

アリスはおかしな事を言った。

俺と風夏は首を傾げる。仕方なく俺は聞いてみた。

「4人？ 俺とアリス、風夏で3人だろ。まさか猫も入ってる？」

「まさか、猫ちゃんはその箱で十分でしょ？」

箱とはダンボールである。

「いや、ダンボールは可愛そうだろ」

「そうよ。猫ハウス買ってあげなくちゃ」

そう言ったのは風夏だ。

「あら、日本ではそんな物まで売ってるの？ じゃ今度の日曜日にでも買いに行きましょう」

「ああ、そうだな。って、今そんな話してないだろ。4人ってなんだよ？」

「あら？ 言っただけでなかったかしら、王女も一緒に住むのよ？」

「はあ？」

「えっ？」

俺と風夏は、一言発して固まった。

「護衛するんだから、当然でしょ？」

まさしく正論だった。たしかに一緒に住まなければ護衛など出来るはずが無い。

「まあ、風夏ちゃんがジンと同じ部屋で良ければ問題ないかな？」
アリスがまたも、とんでもない事を言う。

「えっ、そ、それはいくらなんでも無理です……」
「無理にきまつてんだろっ！」

「っふ、冗談に決まってるでしょ。ほんと、あなた達をからかうと面白いわね」

「……」
「……」
赤面する俺と風夏。

「じゃあ、どうしても風夏ちゃんが一緒に暮らしたいと言っなら、わたしと同じ部屋になるんだけど、良いかしら？」

「は、はい！ もちろんです」

翌日には、風夏の荷物が運び込まれ、俺達3人と1匹の同居生活が始まった。

うれしはずかし同棲生活。

いや思春期の男には、地獄のような同棲生活だった。

そして2ヶ月が過ぎたころ、とうとう王女が来日したのだ。

ルークシア王国、クラリス王女。十五歳。

まさに王女と呼ぶに相応しい貴賓と美貌を持ち合わせた、可憐な少女だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9196w/>

クリムゾン・アイ（魔力を吸う者）

2011年10月13日18時25分発行